

人類を
養殖
している
生物がいる

アラン・イシコフ

人類を養殖している生物がいる

アラン・イシコフ

●はじめに

本書は「ルポルタージュ」の一種だと思うが、「小説」として読まれることになるかもしれない。

フィクションであると思って読んだほうが「無難」だからだ。

しかし、私は小説家ではない。これから書こうとしている内容もまた、小説ではない。フィクション特有のサスペンスやドラマ性を期待して読まないでいただきたい。

本書は、私が今まで直接会った人たちが話したことをまとめたものだ。

登場する人物たちはほとんど仮名にしてある。所属する団体や企業名も、そのままは書けないので、ぼかしてある。

ただし、彼らが語った内容は、ほとんど脚色することなく収録した。一部は小型のICレコーダーに録音したものを元になっている。私の聞き取りミスや理解不足による間違いが若干混入しているかもしれないが、再現性はかなり高いはずである。

本書の内容をどうとらえ、理解するかは、読んでいるあなた次第だ。

出来の悪い与太話、作り話だと唾棄するのは自由だが、先入観や固定観念を一旦捨てて、注意深く読み進めば、ここに書かれた内容を、あながち荒唐無稽とは笑い飛ばせないだろう。

なぜなら、これから私が書こうとしていることは、人類が太古からずっと悩み続けていたことへの明快な解答だからだ。

人間とはなんなのか？

我々はどこから来て、どこへ行くのか？

神は存在するのか？

存在するとすれば、神とはなんなのか？

……こうした問いへの解答が、本書には書かれている。

おそらく、あなたが今まで考えたこともなかった形で。

●シンプソン神父の告白

最初に私のことを少し紹介しておきたい。

私の父はロシア人、母はハンガリー生まれの日本人。さらに、母は国籍は日本だが、正確には日本人の父（私から見れば祖父）とハンガリー人の母の間に生まれたハーフだったそうだ。

「.....だったそうだ」と伝聞体で書くのは、私には母の記憶はないからだ。母は、私が二歳になる前に病死した。写真もほとんど残されていない。

父は貿易商で、日本とロシアを行ったり来たりしていた。私は母親の国籍を継いで、物心ついたときからずっと祖父の実家、つまり、日本で暮らしてきた。ただし、通っていたのはインターナショナルスクールで、そこで英語を話す子供たちと一緒に育った。

そんなわけで、私の外見は日本人には見えないが、日本語は普通に話せる。

ちなみに、アラン・イシコフという名前は本名ではない。本名を名乗らないのは、本書が小説ではないのに小説として発表せざるをえないのと同じ理由からだ。

小学校から高校まで通ったインターナショナルスクールには、いろいろな国籍の子供がいたが、英語圏の子供がほとんどだった。ロシアの血が半分、日本とハンガリーの血が四分の一ずつという私は、学校の中でもときどき珍しがられたが、仲間はずれにされたり、いじめられたりすることはなかった。それは、インターナショナルスクールが自由で開放的な校風だったこともあるが、私の特殊な能力によるところも大きかったと思う。

簡単にいえば、私は人から好かれるのである。

大人たちには初対面のときから可愛がられたし、どんなに性格のきつい子供ともすぐに友達になれた。

思春期に入ると、多くの女の子たちから恋の告白を受けた。

こんなことを書くと、嫌みなやつだと思われそうだが、実は、多くの人たちから同時に好かれるというのは、簡単なことではない。嫉妬を生む要因も人一倍持っていることになるからだ。

自分でいうのはおこがましいが、私は人に好かれようと意図して行動したことはない。ただ、常に公平・公正な聞き手に徹していたと思う。自分の考えを強く主張することはせず、しかし、おかしいと思うことに漫然と染まることもなかった。

その結果、大人になる頃には、人から相談を受けることが多くなった。

「アランはカウンセラーになるといい」と言った友人もいた。

そして実際、今の私はそれに近いことをしている。

私は今四十代後半だが、長い間定職に就いていない。

税務署に申告する際の職業は「翻訳業」としてある。

実際、一年に何回かは英訳の仕事を引き受けるが、それは収入のごく一部にすぎない。また、多少なりとも興味のわく内容の翻訳でないと引き受けないことにしている。

収入の大半はインターネットを使って得ている。いくつものWEBサイトやブログに埋め込ん

だアフィリエイト広告（閲覧者がクリックすると広告主から報酬が支払われる仕組み）の収入。株や為替の運用。ドメイン名やデザイン著作権の転売……そうした、物を作らず、身体も動かさない、一種バーチャルな利得行為だけで生活費を得ている。額に汗して働いている人たちからは貶まれること間違いない。自分でも、常々後ろめたさを感じている。

独り身だし、これだけでもなんとか生きていけるのだが、その他に、「人生相談屋」のようなこともしている。費やしている時間を考えれば、こちらのほうがメインかもしれない。

相談者には基本的にこちらからは金銭を要求しない。一度でおしまいになってしまう相手の場合、たいていは無報酬である。

しかし、中には常連と呼べるような「お客様」もいて、そうした人たちからは、都度謝礼をいただいている。

大きな声では言えないが、これは申告していない。

これから書いていくことは、主に私がインターナショナルスクール時代の同窓生人脈から得た情報である。

最初に書くのは、都内の某キリスト教会の神父から聞いた話だ。

シン普森神父と初めて会ったのは2000年秋のことだった。紹介してくれたのはトミーというかつての同級生だが、彼については後に詳しく紹介する。

私の「お客様」の中に、都下T市で呉服店を営んでいる田口啓治さんという男性がいた。年齢は私より少し上だろうか（私はお客様の生年月日やら血液型やらをこちらから特に訊くことはしない）。一年に一、二度相談に来るというペースが五年ほど続いていた。相談の内容は毎回違っていたが、家族に関することが多かった。

その田口啓治さんの母親・ヨリさんが脳梗塞で倒れ、予後不良と診断された。

ヨリさんは田口家の一人娘だった。婿養子を取って、実家である田口呉服店を継いだが、そのときはすでに経営的には傾いていた。それを、数年のうちに経営を再び軌道に乗せ、以後、ずっと田口呉服店を切り盛りしてきたやり手だそうだ。七十のとき、息子の田口さんに社長の座を譲ったが、その後も、経営にはいろいろと関与していたという。

一言で言えば「強い女性」だったのだろう。

そのヨリさんが、脳梗塞で倒れる寸前、どういうわけか、キリスト教に入信したいと言い始めた。

田口家は代々真言宗で、今までは先祖の法事などは普通に仏式で行っていたという。なぜ急にヨリさんがキリスト教に傾倒したのか、田口さんにはまったく分からない。

問題は、ヨリさんは、キリスト教に入信したいと言った直後に倒れたため、正式には入信していないということだった。それなのに、病院のベッドの上では、田口さんの顔を見るたびに「葬式はキリスト教で」と繰り返し懇願したという。

そんななか、病状はどんどん悪くなり、意識も朦朧としてきた。こうなると、葬儀のことを考えなければならない。

ヨリさんの遺言を守るなら、キリスト教会で葬儀をしなければならないが、信者ではない者の結婚式を挙げてくれるキリスト教会はあっても、葬儀をしてくれる教会はあるのだろうか。そもそも、キリスト教というだけで、ヨリさんが入信したいのがカトリックなのかプロテスタントなのか、あるいはその他の宗派なのかも分からない。

意識がしっかりしているうちに何度か聞き出そうとしたが、「葬式はキリスト教で」と繰り返すだけで、まともな答えが返ってこなかったそうだ。もしかすると、キリスト教に宗派がいろいろあることも、ちゃんと分かっていないのかもしれない。

さて、どうしたものかと、田口さんから相談を受けたときは、正直、私も困ってしまった。

葬儀とは、残された者たちのための儀式だと、私は思う。田口さんが母親の願いを叶えたいと強く思っているのであれば、宗教的な意義より、その思いを大切にすべきだろう。

私の「人生相談」は、精神的なサポートをしたり、問題解決につながりそうな考え方を提示することが主で、便利屋稼業ではない。しかし、このときばかりは、実効的手段を考えざるをえなかった。

私は、インターナショナルスクール時代の友人・トミーに相談した。トミーの交友関係は実に多岐にわたり、顔の広さではピカイチなのだ。

期待にたがわず、彼は即座に、S教会のシンプソン神父を紹介してくれた。

しかし、単に田口さんとシンプソン神父を引き合わせるだけでは無責任だろう。信者ではない者を教会でキリスト教で葬儀するということが果たして可能なのか。可能だとすれば、どのような体裁にするのか。きちんと確認した上で、田口さんに伝えなければならないと思った私は、まずは一人でS教会を訪ねた。

S教会は立派な教会だった。都内の商用地にありながら、広い敷地を持っている。後から聞いた話によれば、数十年前までは都心の一等地にあったが、そこを売って引っ越した際に莫大な金が入り、移転先の敷地面積は数倍になったそうだ。

その教会の正門を潜る寸前、ケータイに田口さんから連絡が入った。担当医から、いよいよ危ないと宣告されたという。

こうなると一刻の猶予もない。私はかなりのプレッシャーを感じながら、S教会に入っていた。

シンプソン神父は笑顔で私を迎えてくれた。

私の顔を見るなり、「英語でも大丈夫ですか？」と訊いてきたので、私は「どちらでも」と答えた。

シンプソン神父はカナダ人で、父親はスペイン系、母親はフランス系だと自己紹介した。日本には二十代のときにやってきて、三十年以上になるという。三十年になるにしては、少しぎこちない日本語だったので、私たちは英語で話した。

神父の英語はフランス語訛りがあったが、とても品のいい英語で聴き取りやすかった。

神父が自己紹介をしたのを受け、私も簡単に自分の出自を述べた。

お互いの自己紹介部分が長くなったので、用件を説明し終えるまでに小一時間はかかったら

うか。

その間、シンプソン神父は時折笑みを浮かべて頷きながら、じっと耳を傾けてくれた。

「……そうですか。お話は分かりました。そういうことなら、今すぐ、そのかたのところへまいりましょう」

驚く私を促し、シンプソン神父は外出の準備を始めた。

田口さんの母親・ヨリさんが入院している病院は、田園風景が残る山間にあった。都心から電車で三十分以上乗り、駅からはタクシーで二十分ほど。行きがかり上、私はシンプソン神父に同行し、交通費も全部出した。

病院の玄関で、急遽私から連絡を受けて駆けつけた田口さんが恐縮しきった顔で待っていた。

病室は個室で、ヨリさんは鼻と腕にパイプをつけられた状態で眠っていた。

その様子を確認したシンプソン神父は、田口さんと私に「少しの間、二人だけにさせていただきませんか」と、日本語で告げた。

田口さんも私も、一瞬戸惑ったものの、素直に指示に従い、部屋の外に出た。

五分ほど経っただろうか、神父は病室から出てくると、私たちに「どこかでお話しましょう」と言った。

田口さんは、私と神父を病棟棟の端にあるデイルームへと案内した。幸い、デイルームには誰もいなかった。

丸いテーブルを囲むように座ると、神父は田口さんにこう告げた。

「安心してください。お母様は今、イエス・キリストにすべてを委ねられました」

田口さんは、神父の言葉の意味が分からず、困惑した目で神父を見つめた。

神父は微笑を浮かべながら、軽く頷いてから続けた。

「これでいつ神に召されても、あなたが心配されることはありません。待ちましょう」

神父が病室で何をしたのか、あるいは何もしなかったのか、それを詮索するのは不要だということは、田口さんにも理解できたようだった。

田口さんは「ありがとうございます」と言って深々と頭を下げた。

田口ヨリさんが亡くなったのはそれから三日後のことだった。

田口さんの話では、結局、意識が戻ることはなかったという。

葬儀はS教会で行われた。田口家の親族にキリスト教徒はいなかったが、教会の婦人会から駆けだされた数人の女性たちが大きな声で聖歌を歌い、式は淡々と進められた。親族たちはみな当惑しながらも、それを見守るしかなかった。

葬儀の中で、シンプソン神父はヨリさんのことを、「人生の最後に、真実に目覚め、神の子になられた姉妹・田口ヨリさん」と言った。

意識のないヨリさんが、神父に何か意思表示をしたとは到底思えない。洗礼を受けたことにならないのは明らかだったが、それに異を唱える者もいなかった。

親族の中ではキリスト教会で葬式をすることを巡っていろいろ揉めたに違いないが、田口さん

はそのへんのことは何も言わず、私には感謝の言葉を重ねるばかりだった。

田口さんはそれまでもかなり高額な「お礼」を私の口座に振り込んできていたが、そのときは、いつもの五倍くらいの金額が入金されていた。

私は好奇心を抑えられず、後日、田口さんに訊いた。

「教会への支払いなどはどうだったんですか？」

田口さんはちょっと躊躇った様子を見せたが、正直に答えてくれた。

「百万円でした。教会への献金という形で五十万円、その他、お礼という形で神父様へ五十万円。葬儀社には二百万円弱でした。全部で三百万円でしたが、仏式で行えばもっとかかったでしょう。戒名代だけでも高いものは数百万という世界ですから。

イシコフさんには本当にお世話になり、感謝の言葉ありません。これで母の遺志をきちんと果たせたと安堵しています」

すべてが予想外の展開だった。

シンプソン神父というのは一体どういう人物なのか。私は俄然興味がわき、お礼を述べる名目で、再びS教会を訪ねた。

平日の午後で、礼拝堂では若い女性が建物据え付けのパイプオルガンに向かって練習していた。お世辞にもうまいとは言えない演奏だった。

そのへたくそな演奏がドアを通して聞こえてくる部屋で、私はシンプソン神父とかなり長い時間、ほとんどは英語で、時折日本語の単語やフレーズを交えながら談笑した。

そう、まさに「談笑」というのがふさわしい、リラックスした時間だった。

途中から神父はワインを出してきた。

神父も話相手がほしかったのだろうか、話し込む内にどんどんうちとけ、口調もほぐれていくのが分かった。

父親がスペイン系、母親がフランス系のカナダ人であることは、最初に会ったときに聞いていたが、今回はさらに細かな生い立ちも口にした。

貧しい農家に、八人兄弟の末っ子として生まれたそうだ。はっきりとは言わなかったが、いわゆる「口減らし」に近い形で修道院に入れられたのだろう。

こんなとき、私は自分の生まれ持った能力に我ながら驚く。

ほとんど初対面の人間と、話をするうちにうちとけ、短時間で本音を引き出す会話をしている。この能力はなんなのだろうか。

このときは、神父のほうからそのことを言い当てられた。

「あなたは実に不思議な人です。話をしていて、とても気持ちがよくくなりますね。思わず気を緩めてしまいます。怖い怖い」

「いえ、神父様こそ不思議な方ですよ。聖職者にもいろんな方がいるんですねえ」

私はそう応じた。神父はニヤッと笑い、こう言った。

「なまぐさ坊主……いえ、なまぐさ神父ですか？ はい、そうです。シンプソン神父は～、な～まぐ～さ神父さん。信者さんに親切なシンプルな神父さん……」

神父は突然鼻歌を歌った。即興なのか、いつも口ずさんでいる自分の「テーマソング」なのか

は分からなかったが、後半の韻を踏んでいる部分が妙に頭に残った。

「なまぐさだなんて、とんでもないですよ。実に懐の深い、ご立派な神父様だと感服しています。田口さんも本当に感謝していました」

「こちらこそ。たくさんご寄附いただいて感謝です。大丈夫だったでしょうか、田口さん」

「大丈夫って、お金のことですか？ 大丈夫でしょう。戒名代より安いと言っていましたよ」

「かいみょう？ ああ、なんとか居士というあれですね。元手がいらないので、うまいビジネスですよ。日本人は頭がいい」

「日本人が発明したんですか？ 戒名というのは」

「違いますか？ 他の国でもあるんですか？ 私は知りません。少なくとも、ブッダはそんなこと教えていませんよね」

そう言って、シンプソン神父はカラカラと乾いた声で笑った。

私もつられて笑った。それを見て、神父は少し真顔に戻ってこう続けた。

「ブッダは素晴らしい人ですね。私は尊敬しています。キリスト教は、神と人間のことにしか目を向けていませんが、仏教はもっと広い世界を包み込む思想です。素晴らしい」

私は驚いて神父の顔を見た。

私の反応を楽しむかのように、神父は悪戯っぽい笑みを浮かべてこう続けた。

「でも、私はお坊さんにはなれませんね。戒名を考えるのは面倒です。正座も苦手です」

「たとえ正座ができて、私たちのような顔の人間は、お坊さんとしては信用されないでしょうね」

私はそう切り替えした。

神父はニヤっとして頷き、今度は少し間をおいてからこう言った。

「ブッダは大きな神を見ていたんでしょう。この世界の中に残されている、本当の神の御技を。

いえ、神の御技だけを見ようとしていたんでしょうね。だから、思想がきれいです」

「思想がきれい？ キリスト教は違うんですか？」

私の問いに、神父は一瞬真顔になった。

口にすべきかどうか悩むような数秒の沈黙の後、静かな口調でこう言いきった。

「ええ。キリスト教は違いますね。仏教は生き方や世界観を教えるものです。でも、キリスト教は人間と神との契約です。しかも、神はひとりじゃない」

「え？ キリスト教は一神教でしょう？」

私はびっくりして訊き返した。

「ええ、表向きはそういうことになっています。シンプルにそういうことにしないと、信者が増えませんから。でも、聖書に出てくる神というのは、いろいろあって、同じものではないんです。いちばん多く出てくるのは、この世を造った神ではなく、人間を造った神のことです」

「この世を造った神と人間を造った神は別なんですか？」

神父はそこでまたニヤッと笑った。

しかし今度は、悪戯っぽい笑いではなく、何かを吹っ切った証としての笑いのように見えた。

「別だと思えます」

神父ははっきりとそう答えた。

私は彼の次の言葉を待った。

「あなたは聖書をちゃんと読んだことがありますか？」

神父が問いかけてきた。

ちゃんと、と言われると少し困る。

「ざっと目を通したことはありますが……。私自身はキリスト教徒ではありませんし……。すみません」

私は正直に答えた。

「では、一般的な日本人に近い宗教観をお持ちと考えていいでしょうか。それなら、最初からていねいに説明しましょう」

「ええ、お願いします」

ちょっと面倒くさいことになったなと思いながらも、私は行きがかり上、そう言った。

神父はクイズを出す少年のような無邪気な笑みを浮かべながらこう切りだした。

「旧約聖書はもともとヘブライ語メインで書かれていることはご存じですよな？」

「ええ……まあ」

私は曖昧に答えた。知識として知ってはいたが、ヘブライ語の聖書を見たことはないし、ましてや読めるはずもない。こんなところで聖書論がくどくどと展開されていくとしたらかなわいな、と思った。

「旧約聖書の最初は創世記ですが、ここに出てくる神は複数形です。ヘブライ語の名詞には、一つを表す単数形と、二つを表す『二数形』、そして多数を表す複数形という、三つの形があります。創世記では『神』という言葉は複数形である『エロヒム』として記されています。これをどう思いますか？」

「どうと言われてましても……。キリスト教は一神教だと思っていましたので……」

私は困惑して口ごもった。

「はい。そういうことになっています。ですから、神が複数形で記されていることについてはいろいろな説明がされています。

例えば、神は人間よりもはるかに尊い存在だから、人間と同じように単数形で表すのは畏れ多い。畏敬の念を込めて複数形にしたのだ、という説明があります。

本当でしょうか？ 普通に考えれば、複数形にすることは、むしろ失礼なことでしょう？

三位一体*という説明もよくされます。『父と子と精霊』というフレーズが、教会の中では何度も使われます。私も、礼拝のたびにそう言っています。

この『三位一体』を表すために複数形で書いてあるというわけです。

しかし、聖書の中には三位一体という言葉は出てきません。これは後からキリスト教会の人間が考え出したもので、聖書の中にはないのです。

今では、英語の聖書などでも、神を単数形で書いているものが多くなりました。疑問を生じさせないように改竄したわけですね。あなたがお読みになったのも、多分、そうした改竄された英語版の聖書でしょう」

「改竄？ 神父は、日々の説教の中でもそうした考えを述べられているのですか？」

「まさか……」

神父は、さすがに口を滑らせすぎたと思ったのか、複雑な笑みを浮かべた。

「私は組織に所属する人間です。組織の中での役割……つまり、職業というものは、日々の生活の中では、なによりも優先します。それは普通のことでしょうか？ トヨタの営業マンの仕事はトヨタの自動車売ることです。たとえ、自分はマツダの自動車が好きだとしても、そんなことは客の前では言いません……。」

……ああ、調子に乗って喋りすぎましたね。忘れてください。あなたはこの教会の信徒ではないし、クリスチャンでもないの、ついつい幼なじみに再会したような気分になって、気を許してしまいました。今の話は、神父としてのシンプソンが言ったことではありません。一人の人間としての『私』が、世間話をしただけです。世の中には、そんな考え方もありますよ、という、一般論として話しただけです。はい」

そう言うと、シンプソン神父は立ち上がった。

ここでおしまいですよ、という明確な意思表示が見て取れた。

もっともっと話を聞きたかったが、しつこくして警戒されては元も子もないと思い、私は改めて礼を言い、教会を後にした。

シンプソン神父はただの変人だろうか。

聖職者も人間だ。世界には、猥談の好きな牧師や大酒飲みの神父がいる。学生時代、実際にそうした聖職者に出逢ったこともある。しかし、「三位一体」は詭弁だと考える聖職者がいることには、正直驚いた。

いや、シンプソン神父は、三位一体を「詭弁」とは言わなかった。神が複数形で書かれていることを説明するための「発明」くらいに考えているのだろう。

その日、部屋に戻ってから、私はインターネットで聖書の拾い読みをした。

聖書を読むのは久しぶりのことだった。

聖書に初めて興味を持ったのは十代後半のことだ。当時、人気のあった雑誌の記事の中に、オーパーツ*とかUFOなどに混じって、旧約聖書*のエゼキエル書*の記述が紹介されていた。

その記事の筆者は、エゼキエル書に出てくる「神」は、月面着陸船かジェットヘリのような「機械」にほかならないと断じていた。

最初は、筆者が面白おかしく解釈しただけだと思ったが、英文の聖書でエゼキエル書を読んだ瞬間、考えが変わった。

四方に伸びた脚と車輪。ジェット噴射で直線運動をして、中央部分には強化ガラスか透明な樹脂でできた風防を持つ運転席がある。その運転席に乗った「人間に似た生物」が、拡声装置を通して外にいるエゼキエルに呼びかけた……。

何度読み返しても、そうとしか思えない。

エゼキエル書の冒頭は、英語訳で読むことをお勧めする。出来の悪い日本語訳聖書とは、リアリティが段違いだからだ。

ある日、川の畔にいたエゼキエル司祭のもとに、空から閃光を放ちながら、燃え上がる雲のような物体が飛んできて着陸した。

そのときの様子を、エゼキエルはこう記している（英文は現代英語訳聖書のもの）。

「雲の中は磨き上げた金属のように輝いていた。

(The fiery center of the cloud was as shiny as polished metal.)

そのさらに中心部には、四つの生物のようなものが見えた。

(and in that center I saw what looked like four living creatures.)

その生物は人間にも似ていた。

(They were somewhat like humans.)

ただし、おのおのの生物には四つの顔と四つの翼がついている。

(except that each one had four faces and four wings.)

脚はまっすぐで、先は仔牛の蹄のようであり、青銅のように光っていた。

(Their legs were straight, but their feet looked like the hoofs of calves and sparkled like bronze.)

四つの翼の下には、人間の手のようなものがついていた。

(Under each of their wings, these creatures had a human hand.)

四つの生物は背中合わせになっており、翼の先端が触れあっている。

(The four creatures were standing back to back with the tips of their wings touching.)

四つの生物は離れずに各方向に移動する。その際も、身体の向きは変わらない。

(They moved together in every direction, without turning their bodies.)

四つの生物はそれぞれ正面に人間の顔を持ち、右側にはライオンの顔、左側には牛の顔、背中側には鷲の顔を持っていた。

(Each creature had the face of a human in front, the face of a lion on the right side, the face of a bull on the left, and the face of an eagle in back.)

それぞれが二枚の翼をひろげ、それは隣り合った生物の翼と接している。

(Two wings of each creature were spread out and touched the wings of the creatures on either side.)

残りの二枚の翼は、胴体にそって畳まれている。

(The other two wings of each creature were folded against its body.)

四つの生物はどの方向に移動するにも一緒に、身体の向きを変えない。なぜなら、どれもがまっすぐ前を向いているからだ。

(Wherever the four living creatures went, they moved together without turning their bodies, because each creature faced straight ahead.)

生物は熱した石炭のように輝き、内部では強烈なたいまつのようなものがピストンのように動いているのが見えた。

(The creatures were glowing like hot coals, and I saw something like a flaming torch moving back and forth among them.)

その炎は燃え上がるたびに閃光を放った。

(Lightning flashed from the torch every time its flame blazed up.)

生物たちも、火の粉のようにすばやく動いた。

(The creatures themselves moved as quickly as sparks jumping from a fire.)

そのとき、私はこの四つの生き物の横に、地面に接するように車輪がついていることに気がついた。

(I then noticed that on the ground beside each of the four living creatures was a wheel,)
車輪は、宝石のように輝いていた。

(shining like chrysolite.)

個々の車輪はまったく同じもので、中部にはさらに別の車輪が組み込まれていた。

(Each wheel was exactly the same and had a second wheel that cut through the middle of it,)
そのため、生物はどの方向にも、向きを変えずに移動できるのだった。

(so that they could move in any direction without turning.)

車輪のリム部分は大きく、周囲にはたくさんの目がついていた。

(The rims of the wheels were large and had eyes all the way around them.)

生物は車輪を自由に制御し、自在に動くことができた。生物が動く方向に車輪も動き、生物が止まれば車輪も止まる。

(The creatures controlled when and where the wheels moved--the wheels went wherever the four creatures went and stopped whenever they stopped.)

生物が空を飛ぶと、車輪もまた一緒に浮き上がる。

(Even when the creatures flew in the air, the wheels were beside them.)

生物の上方には、氷のように光り輝くドーム状のものがあった。

(Above the living creatures, I saw something that was sparkling like ice, and it reminded me of a dome.)

生物の翼のうち二枚は両側の生き物のほうに広げられ、二枚はボディ側に折りたたまれていた。

(Each creature had two of its wings stretched out toward the creatures on either side, with the other two wings folded against its body.)

生物が飛ぶとき、その羽音は海鳴りや大軍の雄叫びのような凄まじさだった。いや、まさにこれこそが全能の神の声だ。

(Whenever the creatures flew, their wings roared like an ocean or a large army or even the voice of God All-Powerful.)

生物が動きを止めると、翼は折りたたまれた。

(And whenever the creatures stopped, they folded their wings against their bodies.)

その生物が羽ばたきを止めたとき、ドームの上から音が聞こえた。

(When the creatures stopped flapping their wings, I heard a sound coming from above the dome.)

そのとき、私は見た。サファイアでできた玉座のようなものを。玉座には、人間の形をした人影があった。

(I then saw what looked like a throne made of sapphire, and sitting on the throne was a figure in the shape of a human.)

その人影の腰から上は、炉の中で熱せられる金属のように光り輝き、腰から下もまた、燃えさかる炎のように見えた。

(From the waist up, it was glowing like metal in a hot furnace, and from the waist down it looked like the flames of a fire.)

その人影は、嵐の後に出る虹のように明るい光に包まれていた。

(The figure was surrounded by a bright light, as colorful as a rainbow that appears after a storm.)

私は今まさに神の栄光に触れたことを知った。私は地に顔をつけてひれ伏した。その私に、声が呼びかけてきた。

(I realized I was seeing the brightness of the LORD's glory! So I bowed with my face to the ground, and just then I heard a voice speaking to me.)

久々にエゼキエル書を読んできたが、やはりとてつもなく衝撃的だ。

四つの折りたたみ式の脚部と、格納できるキャタピラー型車輪を持ち、その中央部にドーム型風防で覆われた運転席を持つジェット推進の乗り物——それに近いものを古代人が見て、必死に描写しようとしたことが窺われる。

金属製の大型機械を知らない古代人は、知っている物体——動物や鉱物などに喩えて描写する

しかない。ライトや剥き出しのサスペンションなどが、生き物の顔に見えたのだろう。気が動転しながらもこれだけのことを記憶して、後に必死に描写した力は大したものだ。エゼキエルが非凡な才能を持っていたことを証明している。

私は、もう一度シンプソン神父に会えるなら、ぜひ、エゼキエル書の解釈を訊いてみたいと思った。彼はどう説明するだろうか。

エゼキエル書の冒頭部分で、特にスリリングなのは、「運転席」のガラス越しに見えたという「人影」(a figure in the shape of a human)のことだ。

この乗り物を操縦し、エゼキエルにスピーカーを通して話しかけた「神」は、人の姿をしており、運転席に座っていたことになる。そんな「神」が、唯一絶対の単数形であるはずはない。となれば、聖書に出てくる「神」が複数形で記されていることも当然だろう。

「エロヒム (E l o h i m)」という言葉日本語に素直に訳せば「神々」と複数にするしかない。

つまり、イスラム教やキリスト教の教典である旧約聖書を、先入観を持たずに、冷静に読めば、こう書いてあるのだ。

「紀元前六世紀、前後左右に直線移動できるジェットエンジンを装備した乗り物を操縦する『人間型の生物』がいて、当時の人間とコンタクトを取ろうとした」

.....これをひとつの出発点として受け入れられるかどうか。

日本は、世界的に見てかなり特殊な宗教分布をしている国だ。

キリスト教徒もイスラム教徒も少ない。結婚式は教会や神社で挙げて、葬式はお寺で行うなどという民族は、世界に類を見ないのではないか。よく言えば、宗教観が凝り固まっていない。

それでも、この出発点を受け入れられる人は、そう多くないのだろう。

だが、ここから先は、どうか余計な先入観を捨てて、素直に読んでいただきたい。

悪友トミーが語る、安部・福田・オバマと神の関係

話は少し飛んで、2008年秋。

ときの首相・福田康夫は、突然総理大臣を辞任すると表明し、メディアを騒然とさせた。

ちょうど一年前には、やはり安部晋三が同じように首相の責務を投げ出している。

二代続けて首相が突然に職務放棄をしたことで、世間は呆れ、怒ったものの、日本人の従順な国民性ゆえか、騒乱の一つも起こることはなかった。

政治家の責任感がどうのこうのという以前に、私はなぜ二人の人間が同じように「心変わり」をしたのかが気になった。

共通しているのは、自衛隊によるインド洋沖の給油活動を継続するのが難しくなったときに、突然、職務を投げ出したということだ。

日本国内の経済問題などではない。多くの国民が納め続けてきた年金の記録が失われたり改竄されたりという信じがたい事態においても、首相が辞めることはなかった。しかし、アメリカ絡みの問題となると、日本の首相は、突然、何かはじけたように行動する。

安部の前の首相、絶大な人気を保っていた小泉純一郎も、ことアメリカのこととなると、感情剥き出しで叫んだものだ。

「日米同盟なくして日本の平和が守れるとでも思っているのか」と。

郵政民営化選挙と言われたあの騒動が、実は、アメリカが、郵貯や簡保の巨大な金を狙えるようにするためのものだったということは、多くの人が指摘していた。しかし、そのことを、なぜか日本のメディアは深く追及しなかった。

結局、日本の総理大臣はアメリカが決めているのだなと、私はだいぶ前から思っていたが、インターナショナルスクールの同級生であるトミーに言わせると、「その程度の認識じゃあ、まだまだ甘い」のだそうだ。

トミー・ボアナムは、私のインターナショナルスクール時代、いちばんの悪友だった。怖ろしく頭の回転が速く、要領がいい。いつも遊びや悪戯のことしか考えていないように見えて、試験の点数はしっかり取る。友達、というより、取り巻きが頭抜けて多い。

煙草より前にマリファナを、しかも中学生のときから経験済みで、高校を卒業する頃には「飽きた」と言っていた。もちろん、ばれて捕まったりといったヘマはしない。

中学時代には誰よりもギターがうまく、ロックバンドを組んでいる友人たちを馬鹿にしながらジャズをやっていたが、高校生になると、サクソ、フルート、それに尺八もマスターしていた。

「金髪のガイジンが和楽器をやるってのがおいしいんだよ」

と言っていたが、うぶな私は、その「おいしい」の意味が分かるまでずいぶん時間がかかった。

トミーの父親は都内で美容整形の開業医をしていた。患者（というより「客」）にはアメリカ人もいたが、ほとんどは日本人だった。

豊胸手術が得意で、腕はかなりのものだったそうだが、もちろん、私自身が体験したわけではないので、噂レベルの話だ。

トミーは、美容整形医を継がせたい父親の意向を受け入れて医大に進み、ちゃんと医師免許も取ったが、結局、医者にはならなかった。証券会社のアナリストをやっていたかと思うと、独立して株や為替でボロ儲けした。それも、私がやっているような素人レベルでの儲け方ではない。

まあ、仕事や生計のたて方のことでは、私も人のことをどうこう言えないのだが。

トミーに久しぶりに会ったのは、2008年の秋、六本木の目立たないバーでだった。雑居ビルの地下にある地味な店だが、料金はそこそこ高い。マスターはインド人で、客の大半は欧米人という変な店だ。

私がその店に入ったのはそれが三回目だったが、トミーは常連のようだった。

彼に会うのは数年ぶりだったが、シン普森神父を紹介してもらったときにメールでやりとりはしている。私はまず、シン普森神父の件の礼を言った。

カウンターで軽く一杯やりながら、近況報告をしあい、そのうちに時事ネタということで、福田首相の突然の辞任の話になった。その話題が出たところで、トミーは意味ありげにニヤッと笑い、「続きはうちでやらないか？　すぐそこだから」と言った。

彼の家は六本木からタクシーで数分のところにある住宅街にあった。これが都内かと思うような閑静な場所で、隣には緑豊かな境内を持つ神社があった。

家は平屋の一戸建て。敷地はそう広くはなさそうだったが、住宅と隣接していないため、贅沢な空間に感じられた。

重厚なドア開けると天井の高い玄関があり、さらに木製のドアを抜けると、軽く二十畳以上はありそうなりビングが広がっていた。

家具はあまりない。巨大なパネル型テレビが壁の一面に据え付けられていたが、その画面が鬱陶しくないだけの十分な空間があった。

ここは貸し家だそうだが、家賃を訊いたら、案の定、とんでもない額だった。

「ほんとに不思議なやつだな。忙しく働いている風でもないのに、こんな家に一人で住む金を持っているんだから」

あまり突っ込んで金のことを訊くのは野暮だと思いながらも、つい、そう口にしてしまった。「二、三日前までは忙しかったよ。これから来年にかけて、円が急騰するんで、その前に米ドルと豪ドルのほとんどと、ユーロなんかの大半を円に替えたところだよ。持ち金をごっそり移動していたから」

「ごっそりって、どれくらい？」

「円にすると……まあ、十億まではいかないよ」

「簡単に言うなあ。君個人の資産で億なの？」

「資産というか、俺の一存で動かせる数字ってことだな。一部は親の金とかも含まれている。リスクはほとんどないから、どうということはない。それに、忙しかったといっても、実際の作業はキーボードとマウスをちょこちょこっと動かすだけだもんな」

「それで億の金が動くんだから、すごい時代だね」

「動いているのかどうかも本当は分からないよな。世の中のほとんどの金には実体がない。実際に札束を見ることもないし。目の前に億単位の札束があったら、面倒くさくてしょうがない。単なる数字だからいいのさ。

まあ、とにかく今は一段落で、しばらくは暇かな。このままゆっくり、円が上がるのを見ながら年越しだ」

トミーがそこまで言いきるのだから、円は間違いなく上がるのだろう。私もその動向は察知していたから、異論はなかった。

ただ、私とトミーとでは、判断の材料がまったく違っているはずだ。私はあくまでもデータや情報を分析して判断するが、トミーの行動を見ていると、どこかから確実な情報、いや、号令に近いようなものが入ってくるような気がしてならない。

そのことを突っ込んで訊くことはしなかった。金のことに食いつくのがかっこわるいということもあるが、知らないほうが安全だという直感のようなものもあった。

話は福田首相がなぜ突然辞任したのかというところに戻った。

トミーは、チリ産の赤ワイン——これはあまり高そうではなかったが、お気に入りらしい——を二つのグラスに注ぎながら言った。

「要するに、触れてしまったわけさ。彼らは。小泉、安部、福田……。何も知らないまま首相になり、あるとき、頃合いを見計らって知らされる。世界がどのように進んでいるのかという真相を」

「首相になると知らされるのかい？」

「いや、そうじゃない。知らせるに値する人間かどうか、知らせたほうが動かしやすい人間かどうかによるね。

俺が思うに、初めて知らされたのは細川護熙だったんじゃないかな。彼の辞め方も実にあっさりしていた。あっさりというのは少し違うな。そう見えただけかもしれない。

まあ、知らされたときの反応は人それぞれだからな。

小泉は驚いたけれど、自分が世界の真相を知るだけの存在になったことに感激し、支配者グループの末席に座って生きることを選んだ。

安部と福田は、自分たちの残りの人生を考え、与えられた役を演じるだけの舞台から降りることを決めた。残りの時間は、好きな者たちとおいしい料理を食ったり、楽しいことに興じて時間の経つのを忘れながら生きたい。そう思ったわけさ」

「ずいぶん抽象的な言い方だね。彼らは何を知らされたというんだ？ そして、誰から知らされたんだ？」

私は訊いた。

「誰から、といえば、アメリカ政府を動かしている集団の誰かだろう。日本の首相が直接コンタ

クトを取れる人物といったら、そのレベル止まりだろうから。何を、といえ、この文明社会がもうすぐ終わるということをさ」

「終末論か」

「そう。この世は終わる。いつ終わるか、どう終わるかが問題なのであって、終わること自体はすでに決まっていること。この世が終わることは神によって約束されたことなから、我々人間がどうこう思い悩んだところで仕方がない。

今、世界を動かしている、あるいは動かしていると思っている人間たちの関心事は、自分が生きていっているうちに終末が来るのかどうかということ。あるいは、自分が終末にどう関わるのかということであって、世界が破滅しないようにするにはどうするか、ではないんだ。

ところが、確たる世界観を持たない日本人には、このことは想像もつかないらしい。世界の指導者と言われている人間が、世界が終わることを既定の事実として受け入れている、という大前提がね。

世界は続くと思っている。二酸化炭素で地球温暖化が進むなんていう、子供でも見抜けるような嘘を、能天気信じ込んで疑わない政治家がいっぱいいる。それもトップクラスにだよ。

まさか、きみはそこまで鈍感ではないだろう？ アラン」

そう確認され、私は中途半端な笑みを返すしかなかった。

「で、終末へのカウントダウンはどのへんまで進んでいるんだ？」

私はそう訊くことで、トミーの話を促した。

「どうなんだろうね。俺は世界を動かしている連中とのつきあいはないからね。ただ、いろいろ想像することはできる。

例えばアメリカの大統領選。これは当初、三つくらいのシナリオが用意されていたんだろうと思う。

一つは、ブッシュよりはまともに見える共和党の大統領を据えて、中東問題をさらに悪化させていくという荒っぽいシナリオ。

二つめは、ヒラリーを使って、穏やかに世界を動かしていこうとするもの。

三つめは、オバマを使って、劇的変化をしたように見せかけ、裏では一気に世界の操作性を向上させようというもの」

「誰が大統領になっても、結局はコントロールされるわけだ」

「それはそうさ。ただ、コントロールのしやすさと、世界の騙しやすさが違って来る。

まず、共和党政権はコントロールしやすくて、これから先、うまく機能しなくなっていく。世界の反発が強まるからね。

それと、共和党政権のほうが、周囲に頭のいい人間が少ない。退役軍人や軍需産業コネクションは、一つの方向に動くのは早いけれど、現場でのやり方が雑なんだな。

二期続いたブッシュ政権で、その雑さ、荒っぽさが限界まで来ていた。だから、今度は民主党政権の番だったんだが、ヒラリーよりはオバマのほうが簡単に扱える。ヒラリーには自我があるけれど、オバマは作られた人形だからね」

「オバマはロボットだと？」

「突然現れ、涼やかな弁舌で大衆を魅了する。あまりにもできすぎていると思わないか？ あれだけ巧妙に作られた道具は久しぶりに見たよ。

普通に考えれば、黒人が大統領になるなんてことはありえないことさ。それに、オバマはアメリカ生まれでもない。ハワイの病院で生まれたというのはでっちあげだ。それがあっさり大統領候補になるというのは、よほどオバマという道具が動かしやすいということさ。

ヒラリーはもともと支配者グループの一員だから、彼らにしてみれば身内を表に立たせることになる。いちばん楽な方法に見えるけれど、彼女のキャラクターに不安がある。彼女は自我が強い。最後の最後は、自我が残る。コントロールする側としては、そのひとかけらの自我が失敗の原因になることを恐れた。

オバマにはそれがない。最初から純粋な道具だからね。巧みな弁舌で、人々に一時の夢を見させるためのマシン。オバマは自分の考えで何かをすることはない。

世界の終わりを前にして、管理者集団は精密な道具を用意し、最終的にはそれを選んだ。

大統領選はオバマが勝つよ」

「決まっているのか？」

「決まった。本当はとっくに決まっていたんだよ。一時期、民主党候補をオバマにするかヒラリーにするかで、オバマで行きたい外交問題評議会*と、ヒラリーを推すメンバーも多かったビルダーバーグ会議*との間で最終調整が若干遅れたけれどね。民主党候補にオバマを選んだ時点で、もう決まりだった。ロックフェラーからの資金援助もある」

トミーはまるで秘密会議のその場に居合わせた記者のような口調で言った。

「決まりだったのに、また揉めたのか？」

「いや、揉めるというほどじゃない。アメリカは今、大きな経済問題を抱えているんだ。大統領選が終わったらすぐに、相当荒っぽいことをやらなくちゃいけない。それをやるためには共和党政権のままのほうがやりやすいという意見が守旧派連中から出たんだが、そういう無茶をサクッとやるためにこそオバマを大統領にするんじゃないか、という主流派の主張に、結局は折れざるをえなかったようだよ」

「大統領選直後にやらなければいけない荒っぽいことって？」

「不動産バブル崩壊の後始末さ。

ゴールドマン・サックス*やモルガン・スタンレー*といったアメリカ金融界のトップ企業に、巨額の公的資金投入をするはずだ。おそらく5000億ドル以上。ひょっとしたら1兆ドルに迫る金額になるかもしれない」

「1兆ドル？ ざっと100兆円ってことだぜ。日本の国家予算の額だ。ちょっと信じられないな。なぜ超大手金融にそんな大金が注ぎ込まれるんだ？ ゴールドマン・サックスやモルガン・スタンレーがそんなに危機に陥っているのか？」

「これはね。サブプライムローン*という詐欺的な低金利商品売りまくって、回収不能になったことが原因なんだが、連中はそれを危機だとは思っていない。最初から破綻は分かっていたし、それを利用して逆に焼け太りすることも計算済みだからね。

ゴールドマン・サックスなんかは、その前にもすっかりボロ儲けしている。住宅ローン債務担

保証券ってやつを1000億ドルも売っているんだ」

「債務担保ってことは、サブプライムローンの破綻で大損するんじゃないのか？」

「表向きはね。でも、その証券を空売りして逆に儲けている。『逆張り』っていうんだが、証券価格が高騰しているときに、傘下のトレーダーを使って下落を予想した空売りをするのさ。これで、証券会社本体は数十億ドル規模の損失を出したことにしながら、裏ではそれを上回る利益を上げているんだ。

オバマ政権ができれば、今度は会社が破綻すると言って公的融資を受け、焼け太りするだろう。だから、ちっとも危機じゃない。おいしい儲け話なのさ」

「う〜ん……」

もとより金の話にはあまり詳しくない私は、それ以上、突っ込むこともできなかった。そんな私のためにか、トミーはごていねいにこう続けた。

「な？ アラン、これが現実なんだ。

サブプライムローンという詐欺に近い金融商品を支えたのは、アメリカ国内の金だけじゃない。世界中の金融機関であり、そこに預金している人たちだ。だけど、金融機関の人間はともかく、善良なる預金者たちは、自分たちが被害者だとは思っていない。

兆の単位の金というのを、一般庶民は想像できない。どんなに巨額な金でも、それを支えているのは自分たちの稼ぎなのに。哀しいことだな。

こんなことを個人がやったらたちまち逮捕され、処罰される。でも、国家をまたぐ規模でやれば通ってしまう。

で、今はもう少し巧妙な詐欺も出てきている。環境ビジネスというやつだ。

集めた資金を地球温暖化対策などの環境事業に充てるといふれこみの環境支援型外債*ってやつを知っているか？ これもサブプライムローンと同じ仕組みだな。

ビジネスとしてもともと成り立たない事業に対して、世界中の金融資本から金を集め、無理矢理事業を進めさせる。環境と言われると無条件にいいことだと思いきこむ大衆につけこんだ、世紀末的な金融詐欺だな。低所得者向けのローンなんていう名目よりはずっと騙しやすい。

環境ビジネスの多くは、エネルギー収支を無視したイメージ先行のものだから、純粋な事業としては成立しないんだが、政府からの補助金に加えて、民間からも莫大な資金が注入されることで、しばらくは突き進むことになる。不動産バブルと同じだよ。結果として、ますます地球環境は破壊される。

今の環境ビジネスバブルが破綻するときは、環境破壊と資源枯渇がさらに進んで、地球という土台そのものが破壊されたときだ。もはや担保するものは何もない。いくら公費を注ぎ込んでも、地球の生態環境や資源の枯渇を修復することはできないからね。

それでも、こういう手法が通じるうちは、資本を持っている者が一般大衆からとことん金を吸い上げていく。国や投資家はひたすら巨大金融資本が倒れないように支え続ける。

……これが現代社会の構図なんだよ」

「なるほどね。で、金の話以外ではどうなるんだ？」

「オバマ政権ができた後の世界の動向ってことか？」

「ああ。外交面というか、国家間のパワーゲームはどうなっていくんだい？」

「外交面では、そうだな、ブレジンスキー政権とでも呼ぶべきものが作られるだろうよ」

「ブレジンスキー政権？」

意外な名前が出てきて、私は思わず問い返した。

「そう。あのブレジンスキー*。カーター政権のときの大統領補佐官。外交問題評議会のメンバーで、彼がオバマの外交補佐を務めることが決まっている。

もういい歳だけれどね。自宅のテニスコートで澆刺とテニスをプレイしているそうだよ。体力も知力も並はずれている。表に出てくる人間——つまり、我々が名前と顔を知ることができる公人としては、最も優秀な一人だろうね。

彼は相手によって言葉を変えることを知っている。公の場ではしごくまともなことをズバズバと言って、信頼を得る。イラク戦争はブッシュ政権最大の罪だというようなことをね。しかし、特定の人間を相手にしたときは、うまく心を掴む話し方や内容に変えてくる。戦争好きの金持ちを相手にすると、人間がみんな平等で同じ価値の命を持っているなど戯れ言だ、というようなことを平気で言う。何を考えているのか、我々凡人には見抜けない」

「我々凡人……って、僕はともかく、ここまで世界情勢に詳しいきみは、凡人には見えないけどね」

「いや、俺が言っている『凡人』というのは、能力のことじゃない。世界をコントロールするゲームに直接参加していない一般の人間、その他大勢の人間、という意味さ。その意味では、俺は純粋に凡人だよ。だからこうして与太話もしてられる」

そう言うと、トミーはワイングラスを軽く持ち上げる仕草をして笑った。

「とにかく、オバマが大統領になった後の世界は、今までよりはずっと巧妙に、しかし加速度的に終末へと突き進んでいくんじゃないかな。

お膳立てはブッシュ政権という大味な道具で作った。9 1 1*のような荒っぽいお芝居も、一応成功したと言っていいだろう。後はブレジンスキー政権、あるいは、彼と同等の能力を持った補佐官や政務官、アドバイザーらによって動く新政府によって、ていねいに仕上げられていく。...そんな気がするね」

そこまで言うと、トミーは一口でワイングラスを半分ほど空にした。

「しかし、なぜそんなに世界を終わらせることに執着するんだ？ その……支配者グループだかなんだかは」

私は訊いた。

「そう決まっているからさ。いや、神がそう決めている、と言ったほうがいいのかね。

出来でいえば、ブッシュとブレジンスキーでは公衆便所の落書きとピカソの作品くらい違うだろうが、共通しているのは神との契約を信じているということさ。

この世界はいずれ終わる。そのときに自分は、神によって選ばれた人間になる。たとえ肉体が死んでいたとしても、神の手によって精神が復活する。……そう思っているのさ」

「肉体が死んでいても精神が復活する？ どうやって？」

「そんなことは分からないさ。我々凡人にはね。いや、多分、連中だって正確には分かっていな

いと思うよ。想像はできるだろうがね。

俺は、今までいろんなやつと、世の終わりの後に来る『千年王国*』と呼ばれる新世界のイメージについて話してきた。

ある者は、石油エネルギーに代わる新エネルギーがもたらされると言った。

ある者は、遺伝子工学の進歩によって、肉体が減んでも精神の入れ物をいくらでも更新できる不老不死の世界が来るのだと言っていたな。

そうした、今の人類にはない技術と知識を、神は選ばれた人間たちだけに与えてくれるのだ、というイメージらしい」

「とても分かりやすいね。しかし、いずれにしても、その前に多くの人間が死ぬわけだろう？ 神によって選ばれなかった人間は一掃される、と」

「そういうことだな。地球が舞台である以上、ここで幸福に暮らせる人間の数には限りがある。一説には、適正数はせいぜい五億人程度ではないかということだね」

「五億？ 生き残るのは一割もないのか？」

「そうだな。でも、五億というのは、産業革命の前の世界人口だよ。ほんの三百年かそこいらの短期間に、人間は異常繁殖した。今の人口は明らかに過剰なんだ。

世の終わりが神によってプログラムされていてもいなくても、これ以上人類が増え続けることはできない。石油文明を発展させるために、ある程度の世界人口は必要だった。でも、残された資源の量を考えれば、これ以上、石油やレアメタルを使う人間が増えていくのは困る。選ばれた少数の人間が、残った資源ときれいな環境を使って楽な生活を続ける。そのためには、増えすぎた余剰人口はバッサリと切り捨てる必要がある。

その計画をスムーズに進めるためには、大衆には現実を知らせないようにしなくてはいけない。常温核融合*で究極のエネルギーが得られるだの、二酸化炭素が増えて地球が温暖化しているだのといったデマをメディアを使って流してきたのも、最終的には、大衆に現実を悟らせず、技術の進歩で未来が開けると思わせるための策さ」

「策って、誰が考え出した策なんだ？」

「誰って言われてもねえ。俺は何度も言うように、凡人、一般大衆の側だからね。神に選ばれた人間じゃない。

神や、神に選ばれた人間について、俺には今ひとつ具体的なイメージが掴めていないんだ。計画を進めている連中にしても、彼らが神に選ばれているのか、つまり、千年王国に生き残れる人間なのかどうかは怪しいと思っているよ。神はそんなにお人好しじゃないかもしれない。生き残る人間は確実にいるだろうけれど、それがどういう基準で選ばれるのか、俺には分からないな」

「じゃあ、それは漠然としたイメージということでもいいよ。例えば、僕もきみも、生き残るほうには入っていないってことだろう？」

「多分……ね」

「ましてや、人間の活動によって排出される二酸化炭素の量を減らせば地球環境を延命できるなどと思いきまされている大衆は、最初から死ぬほうに算入されている。そういうことか？」

「まあ、そういうことなのかなあ。ひとつ確実に言えるのは、能天気な理想論も、大衆向けの宗

教も、すべては死んでいく者たちへのモルヒネだってことさ。大衆の善意に訴える巧妙な麻酔薬だな。

さらに細かいことに目を向ければ、この国、日本では、これから先、理不尽な暴力犯罪や、有名人がつまらぬ罪で断罪されるといった事件が増えていくはずだ。一般大衆の思考力を鈍らせ、視点を逸らせ、感覚を麻痺させるためにね。

創造性を墮落させるような社会、投機的な生き方と、その惨めな最後。そういうものを目の当たりにするうちに、人間はどんどん生きる意欲が失せていく。しかし、追いつめられ、苛立ってきてても、どこかで、自分たちはまだ幸せなんだと言い聞かせたい。

この状態が進むと、社会にまとまったエネルギーや方向性が生まれてこない。個人はますますバラバラに生きていき、共通認識というものが芽生えない。暴動を起こすほどのエネルギーが蓄積されない。

一方で、イスラム圏の一部のように、宗教がまだまだマインドコントロールの道具となりうる世界では、怒りのエネルギーを一つの方向に集中させることで自爆的な世界を加速させることができる。その方法が有効なうちは、まだまだ地域的戦闘による破壊は続くだろうね」

そこまで言うと、トミーはほとんど空になったワイングラスをちょっと傾けて、乾杯の仕草をした。

私は黙って、自分のグラスに初めて口をつけた。

「ただねえ……」

トミーはそう言うと、数秒唇を歪めたまま黙り込んだ。話題を変えようとする、あるいは、自分で自分のお喋りを仕切り直そうとするときの彼の癖だった。

「今こんなことを話している自分が、何者かにうまくコントロールされているんじゃないかと思ったりもするのさ」

どこまでひねているのだろう、と、私は苦笑した。

トミーは少し背伸びするようにして椅子から立ち上がると、壁のスイッチに触れた。

部屋の奥でブラインドが電動で開き、かすかにライトアップされた庭が目の前に広がった。

その動作があまりにも自然だったので、どんなもんだと見せびらかすような仕草には見えなかったが、都心の一等地にある庭付き一戸建てに一人で住んでいるということに、私は素直に圧倒された。

庭を誉めるのもちょっと癪だったので、こうしてみた。

「きみが金持ちだということは聞いていたけど、なんとなく、六本木ヒルズみたいな、見晴らしのよい高層マンションの部屋に住んでいるんだと想像していたんだ。こんな風に、地面の上に住んでいるとは意外だったよ」

それを聞いて、トミーは笑って答えた。

「俺は高所恐怖症なんだ。高い金を出してわざわざ危険な高層ビルに住むような真似はしないさ。地震でエレベーターが止まった高層ビルに取り残される恐怖を味わいたくないし」

「911みたいにテロリストが運転した飛行機が突っ込んでくるかもしれないし？」

「日本では、それはないだろう。WTCビルのように、こっそり爆薬を仕掛けるのは難しいか

らな。テロへの恐怖を植えつける芝居として、爆弾テロのようなものはあるかもしれないが、それをやるとしても、ターゲットはデパートとかのほうがりやすいだろう」

「爆薬を仕掛けるって……？」

私はトミーの言葉が理解できずに訊き返した。

「WTCのことさ。……え？ おまえ、まさか知らないわけじゃないんだろう？ 911がアルカイダとかいうテロリスト集団による犯行だと信じているわけじゃないよな？」

「いや、いろんな陰謀説があることは知っているけれど……」

相手がトミーでなければ、もっと普通に答えるのだが、トミーに言われると途端に自信がなくなる。咄嗟に曖昧な答えをしたが、トミーにはすぐに見抜かれてしまった。

「呆れたなあ。今までの俺の話をちゃんと聞いていたのか？ がっくりくるぜ。」

航空機が突っ込んで外壁に穴が空いたところで、高層ビルがきれいに崩れ落ちるなんてことはありえない。しかも、飛行機がかすってもいない、いちばん離れていた第7ビルが一瞬で崩れ落ちた件に至っては、冗談にもならないだろう？

ペンタゴンに突っ込んだのは旅客機ではなく、米軍のミサイルだということも、まともな人間ならみんな知っている。それを、陰謀説だのなんだのといって、常識のない人間の戯言のように片づけようとする連中こそ、思考停止している。

ああ、くだらん。まさかおまえさんがそのレベルの人間だとは思ってもいなかった。どっと疲れたよ。

「悪いな。うちには予備の寝具がないんだ」

突然そう宣告され、私も気持ちが折れてしまった。

スペース的には何人でも泊まれそうだが、トミーの性格からすると、ゲストルームなどというものは考えないに違いない。余分な寝具はないというのは嘘ではないだろう。

「ああ……長居してしまったね。帰るよ」

私はグラスに残ったワインを飲むと、椅子から立ち上がった。

表通りに出ればいくらでもタクシーが拾えると言うトミーに軽く手を上げ、私はトミーの家を出た。

門を出て振り返ると、一人で暮らすには大きすぎる一戸建てが、シルエットとして、何か非現実的な映像のように浮かび上がった。

私は少しだけ嫉妬と空虚感を抱きながら、空車表示のタクシーが横を何台も走り抜けていく表通りを歩き、地下鉄の駅へと降りていった。

●弱視の物理学者 小岩沢潔教授

トミーは少年時代から一風変わったやつだったが、大人になるにつれ、シニカルな世界観をますます固めていったようだ。

正直な話、この時点では、私はまだトミーが語ったことの半分は聞き流していた。お得意の与太話がまた始まった、懐かしいな、という程度にしかとらえていなかった。

今、正確に再現できているのは、常に身につけている腕時計型のICレコーダーのスイッチを無意識のうちにONにしてあったからだ。このレコーダーは優れもので、内蔵メモリに最長200時間の録音ができる。後から真剣に聞き直すことは稀だが、トミーとのこのときの会話は、かなり時間が経ってから拾い出して、きっちり聞き直した。

トミーの家を訪ねた数日後、私は珍しく、翻訳の仕事を引き受けていた。

日本人物理学者がヨーロッパの気象学会に提出する論文原稿の英訳で、小さな翻訳エージェント経由で打診されたものだが、興味のある内容だったので引き受けた。

元原稿はネット経由でデジタルファイルの形で送られてきたが、文字データではなく、MP3形式で圧縮された音声データだった。

依頼主の小岩沢潔教授は、もともとかなりの弱視だったが、ここ数年はさらに悪化して、ほとんど視力を失った状態だという。そのため、原稿は助手に口述筆記で書かせているが、英訳であれば、直接話したものをそのまま聞き取って英語にしてもらったほうが早いだろうからと、こういう形で送ることにしたということだった。

録音した会話を聞きながら内容を文章にまとめるという作業は、私にとっては珍しいことではない。自分でICレコーダーに録った内容を聞きながら、この文章も書いているわけだし、特別な苦労はないと思ったので、その方式でいいですよ、と応じたのだ。

幸い、小岩沢教授の話し方は明解で、声も若々しく、聞き取りやすかった。

内容は、二酸化炭素と気温の関係について。

現在一般に言われているように、大気中の二酸化炭素濃度が上がって気温が上がるのではなく、気温が上がったことにより、主に海水中に溶けていた二酸化炭素が大気中に出てきて二酸化炭素濃度が増える、というのが、その論文の主旨だった。

この論は世界中で複数の学者が主張しているので私も知っていたが、改めて小岩沢教授の話聞き、自分で英文を書いてみると、論理が明快で、一種の快感を覚えた。

教授の話は、そのまま論文に起こすことを前提にしているため、基本的にはきれいにまとまっていたが、時折、脇道にそれることがあり、その部分が特に面白かった。

「……そもそも、温暖化温暖化というのが、温暖化というのは気候変動のひとつである。また、地球全体が一様に温暖化、あるいは寒冷化するということはあまりない。例えば、過去五十年を見ても、地球全体の平均気温は上昇基調にあったし、北極圏でも大陸部、すなわち、シベリア、ア

ラスカ、カナダなどは明らかに温暖化していたが、グリーンランドなどはむしろ寒冷化していた。

また、温暖化といっても、過去百年で起きた平均気温の上昇は一度に満たない。〇・六度ほどである。この程度の上昇で、地球環境が危機的な状況に晒されているなどという論を展開するのはナンセンスである。もっと大きな、二度とか三度といった変化を、我々は毎年局所的に体感することがあるが、それは長期的な気候変動というよりは、異常気象というものであり、異常に暑い夏や異常に寒い冬があったからといって、すぐに生物が死滅することはない。

北極といえば、温暖化によってホッキョクグマが絶滅の危機に瀕している*などという馬鹿げたプロパガンダをぶちあげる団体がいるが、あれほど低レベルで悪質な嘘がまかり通るようでは、世も末と言うべきである。

ホッキョクグマの生息数は現在安定している。過去において、激減した時期があったが、これは気候変動とはなんの関係もない。人間、特に北米の白人富裕層が銃によってレジャーハンティングを繰り返したせいである。レジャーハンティングを規制した途端、ホッキョクグマの生息数は劇的に回復した。

そもそも、詳細なデータを見ていくと、過去五十年、寒冷化した地域のホッキョクグマは数が減り、温暖化した地域のクマは増えていることが分かる。

……う～ん、どうしようかな。ちょっと話が脱線して、本論から外れてきたので、このホッキョクグマの部分はカットしましょうか。原稿を起こしてくれているあなた、ごめんなさいね。

……では、話を戻して、気候変動と異常気象を区別しなければいけないという話……ね」

とまあ、こんな感じの音声データを聞きながら英文の論文にまとめていく作業は、ときどき混乱させられたものの、退屈はしなかった。

後から「ここはカットしよう」と言いだした脇道の話をもっと先まで聞いていたいと思うことがたびたびあった。

約束の期限より数日早く、英文への翻訳は一通り済んだ。

この時点で、私はエージェントに、直接小岩沢教授に連絡を取り、いくつか確認したいので、直接うかがって話を聞けないかと申し出た。

実際には、翻訳作業に影響しそうな不明点はほとんどなく、この教授がどんな人物なのか、直接会ってみたいという好奇心からの申し出だった。

教授はコンピュータを使わないそうで、連絡はたてやま楯山という助手が受けていた。

小岩沢教授の教え子のひとりらしい。

楯山助手は当初、私からの申し出にあまり色よい返事をしてこなかったが、結局、教授宅を訪問する約束を取り付けることができた。

東京都下、埼玉に近い郊外。私鉄の駅を降りて、地図を頼りに、これといった特徴もない風景の中を十五分ほど歩いたところに教授の家があった。

十一月の末だったが、朝からひどく冷え込む日で、歩いている間、耳が寒さで痛くなるほどだった。

家はサイディングの外壁で、新建材を多用したありふれた一戸建てだった。周囲の家に比べると少し古く、安っぽい。

門の前の道路には、クラシックテイストにデザインされた黒い軽自動車一台停まっていた。よく見ると、サイドに、太さの違う赤いピンストライプが二本入っている。ずいぶんこだわりのあるオーナー像が浮かぶが、弱視の小岩沢教授の所有物でないことは確かだろう。

玄関ドアを開けて出迎えてくれたのは楯山助手だった。メールでしかやりとりしていなかったが、私は漠然と、眼鏡をかけた痩せ型の神経質そうな男性を想像していた。しかし、現れたのは、相撲取りのようなごつい男だった。眼鏡もかけていない。

「どうぞ」

楯山助手は、なんの挨拶もなしで、一言そう言った。これまた体型に似合わず、妙に甲高い声だった。

リビングを抜け、さらによく分からない部屋を通り過ぎた奥の部屋に教授はいた。

大きな窓があったが、曇っているせいか、部屋は薄暗かった。

窓からの逆光で、木製の椅子に座った博士の顔は、目が慣れるまで、よく見えなかった。

「寒かったですよ。寒冷化しているんだねえ、やっぱり」

教授はいきなりそう言って私を迎えた。

偏屈な人だとは想像していたが、予想以上かもしれない。

助手は、私を部屋に案内すると、すぐに出て行ってしまった。

「僕は目が悪くてね。部屋も暗くしていますが、我慢してね。すぐに目が慣れてくるから」

「ええ、大丈夫です」

「ああ、日本語、うまいのね。話には聞いていたけれど、完璧じゃないの」

「はい。日本で育ちましたから」

「そうなの？ よかった。僕は英語はそんなに得意じゃないんでね。まあ、得意なら、あなたに翻訳を頼んだりはしないわね、そもそも」

ところどころ女性っぽい口調になる。

目が慣れてくると、教授の表情もよく見て取れるようになった。言葉が途切れたとき、口元に奇妙な笑みを浮かべるのが癖のようだ。

私は簡単な挨拶を済ませ、一応用意しておいた質問をひとつふたつ口にした。

教授は質問の内容で私を値踏みするような目つきで見ていたが、実際には私の顔はほとんど見えていないのかもしれない。

あまり教授を退屈させてもいけないと思い、私は早めに話を脱線させる方向に誘導していった。

「先生のお話はとても明解で、これならどんな人でも、疑問の余地なく、CO₂温暖化説がいかにか怪しいか分かるだろうと感じました。でも、実際にはまったく逆の論が世界を席卷していますよね。温暖化を止めなければならない。そのためには、人間が発生させているCO₂を削減しなければいけない、と」

「ふん」

教授はほとんど言葉にならないような、鼻から漏れる息だけの返事をした。

そのまま黙ってしまったので、私は仕方なくたたみかけるように質問した。

「なぜなのでしょう。学者、政治家、官僚……頭のいいはずの人たちが、なぜ揃いも揃って温暖化危機を叫ぶのでしょうか。彼らは本当にCO₂温暖化説を信じて行動しているんですか？」

環境ビジネスバブルの話がすでにトミーから聞いていた私は、この問いへの答えを少なくとも一つは知っていたが、物理学者の立場から別の答えを期待していた。

しかし、教授の答えはそっけなかった。

「そんなこと、僕が知るはずないじゃないの」

「え、ええ……まあ、それはそうでしょうけど……」

教授は私の顔をじろっと睨むように見ると、仕方ないなあという表情で言った。

「そりゃまあ、いろんなケースがあるでしょ。本気で信じている人もいれば、信じているふりをしているだけの人もいるんじゃないですか？」

とにかく、温暖化危機を叫んでいる人全員が、本気でこんな馬鹿な話を信じているとは思えないよね。そうでしょ？ おかしいってことは、ちょっと考えれば、子供でも分かることなんだから。

そもそも、温暖化して何が困るんです？ 作物はいっぱい採れるようになるし、暖房代も減らせるし、飢えて死ぬ人も減る。いいことばかりじゃないの。その逆は悲惨ですよ。暑すぎて死ぬ人と寒さで死ぬ人の数を比べてごらんさいな。桁が違います。

例えば、2003年8月にヨーロッパを熱波が襲って、たくさんの方が死んだのよ。イギリス全土で約二千人が死んだんですね。これはいわゆる異常気象です。特別な夏だったわけですね。

でもね、イギリスでは、毎年、冬には二万五千人くらいの方が寒さで死んでいるのよ。二千五百人じゃなくて、二万五千人。一桁違うのよ。異常気象による特別な年の出来事じゃなくて、毎年、冬には普通に万単位の方が寒さで死ぬんです。

暖かくなったら、この二万五千人は減るでしょうね。そんな簡単なことを分からない人ばかりが、学問や政治の世界を形成しているとしたら、どうしようもないでしょう」

「でも、そうなってますよね」

「だから、変だと言っているんです。本当のことを知らないはずはないと」

「だとしたら、本当のことを知っているのに、CO₂温暖化説を唱える人たちというのは、そういう嘘をつき、偽情報に乗っかることで、何かメリットがあるんですか？」

「悪あがきですよ。今まで通りの石油文明の栄華を、自分たちが生きていく間だけでも続けたいという悪あがき。」

石油はすぐにはなくなりません。でも、いつかはなくなります。その前に、需要が供給を追い抜いてしまう、いわゆるピークアウトと呼ばれる限界点があるわけね。これは数百年とかではなく、数十年のうちに来るかもしれません。本当はもう少しもつはずだったんですが、中国とインドが急速な経済成長をして、アメリカ型石油消費文明の真似をし始めましたから、ここから先は一気になくなるんじゃないですか。

石油だけじゃない。レアメタルの枯渇はもっと早い。ジェット燃料がなくなって飛行機が飛べ

なくなるより、レアメタルがなくなってジェットエンジン用のタービン翼が作れなくなるほうが早いかもしれませんよ、あなた。

それと、言うまでもなく環境破壊よね。人口爆発による環境破壊で、この文明は終わります。その終焉の時期を少しでも伸ばすためには、資源をけちけち使って、贅沢をやめるしかない。でも、お金持ちはそうは考えないのね。自分たちが金儲けしてきた方程式を崩したくないんですよ。

そこで、環境を守れ、という、一般大衆が反論できない規範を金儲けの軸にするという方法を考え出したんですね。いわゆるエコビジネスというやつです。

いちばん分かりやすいのは自動車産業でしょう。今までは、自動車をたくさん作り続けることで、自動車メーカーは巨額の利益を得てきた。でも、無限成長ということはありません。何十年も壊れない、何十万キロも走る丈夫な車を作る技術はすでに確立しています。でも、それでは自動車を作り続けることができない。

そこで、まだまだ走れる車をどんどんつぶして、新しい車に買い換えさせる理由を考え出す。私の同僚にも、それまで乗っていた車を手放して、二百万円以上するハイブリッド車に買い換えた人がいます。でも、それまで乗っていた乗用車は、二万キロも走っていないんですよ。休みの日に家族で郊外のショッピングセンターに行くとか、年に何回か、渋滞した高速道路を使って、混み合った観光地に行くとか、そんな程度の使い方しかしていない車ですから、走行距離は伸びない。全然乗っていないうちから、飽きちゃうんですね。乗用車というのは飽きるんです。仕事で使う車とは違って、必要性よりも、所有することに喜びを感じる要素が大きいからです。

本当なら、まだまだ走れるから買い換えなくてもいいのに、買い換えたほうが環境にいいというようなことをテレビで繰り返し聞かされると、それなら……と、背中を押されて買い換えてしまう。

二百万円以上する乗用車を買って換えられる家というのは、そこそこの裕福層ですよ。本当に車が必要な田舎の人たちは、そんな余裕はないから、軽自動車に乗っています。それも、壊れるまで乗っています。これがいちばん経済的な自動車の使い方でしょうね。

でも、そういう使い方をする人、つまり、小さくて安い車を買って、その車に長く乗り続ける人が増えると、自動車メーカーは儲からないんですね。メーカーとしては、高い車を短い期間にこころろ買い換えてくれたほうがありがたい。

大して必要性もないのに乗用車をちょこちょこ買い換える人たちが燃費のいい車に乗ろうが乗るまいが、資源節約には寄与しません。大して乗らないのであれば、同じ車をずっと持ち続けてくれたほうが資源の浪費をしなくて済むということくらい、子供でも分かることでしょう。自動車を一台作るのに、大変な資源とエネルギーをすでに使ってしまったんですから。ハイブリッドカーともなればなおさらです。軽自動車一台を作る何倍もの資源とエネルギーを使っています。あの巨大なバッテリーに使われるニッケルやリチウムなどの希少金属だって、大変なものですよ」

「となると、エコカー減税なんていうのも、馬鹿げていると？」

「あつたりまえでしょ。減税というけれど、要するに私たちが払った税金をばらまいているんで

すよ、あなた。税金で足りないとなると、国債、つまりは私たちに国が借金をして自動車メーカーにあげてしまう。なんなんですか、それは。

だから私は言うんです。エコカーというのは恥ずかしいと。でも、私がこれだけ言っても、息子はプリウスがほしいほしほしと言って、買ってしまいましたけれどね」

そう言うと、教授はぶいっと横を向いた。

その仕草がおかしくて、私はつい声を出して笑ってしまった。

教授は私の反応にはお構いなく、こう続けた。

「もっとひどいのは太陽光発電や風力発電への税金投入ですよ。新エネルギーだの更新性エネルギーだの自然エネルギーだのと、あたかも未来を切り開いてくれる新技術、負荷の少ないシステムのようにPRして、なけなしの国費を浪費しています。馬鹿も休み休みにしなさい、と言いたいわけです。

特にお話にならないのは風力発電です。風が吹かなければ発電できないのに、いつ風が吹くかは予想が立たない。30分後に定格出力いっぱい発電しているのか、風がやんで発電ゼロなのかも分からないんですよ。そんなもの、使い物になるわけがないじゃないですか。これはもう、技術革新でどうこうできる問題じゃないんです。人間の力で風を吹かせられるわけじゃないんですから。

一年を通じて、電気が足りないのは真夏の昼間、特に一時から四時までの三時間は『サマーピーク』といって、すべての発電所をフル稼働させても発電能力が足りなくなるのではないかと、電力会社が神経をすり減らす魔の時間帯なんです。ところが、そういうとき、風車はまず回っていないでしょ。真夏のいちばん暑いときはたいてい無風ですから。

逆に、真冬の真夜中とかは電気が余っている。火力発電所や水力発電所を全部止めて、原発だけにしてもまだ余るから、仕方なく、原発で作った電気を揚水発電所というダムに回して、水を汲み上げておく。それでも余るから、夜間電力を安売りして、なんとか夜中に電気を使ってもらおうと必死になる。

電気が余って困っているそういうときに、風はびゅんびゅん吹き荒れたりするんですね。突然フル稼働で回り始める風力発電所から、無理矢理電気を送りつけられる。いらぬ電気なのに買わなくちゃいけない。法律でそう決めてしまったから。迷惑なだけのやっかいな電気を、なぜ優遇して、高い料金で買い取り義務を負わせるんですか。しかも建設費用の三分の一を国が補助しているんですよ。

それだけでも噴飯ものなのに、補助金をつけても、買電の価格を優遇してもどんどん赤字が出るものだから、ついにはグリーン電力だのなんだのという名目で大手企業から金を集めて、風力発電施設を援助する。企業は、私たちの会社は環境のことを考えて、風力発電にお金を出していますよというPRになると思っているのだから、こうした出費は広告費として計算する。

これはもう発電事業でも何でもなし。エコエコ詐欺とでも呼ぶべき犯罪行為ですよ。

詐欺ではないというなら、日本全国に無理矢理建てた風力発電施設がどれだけ有効な発電をしているのか、ちゃんとしたデータを公開すべきです。そんなデータ、出てきませんよ、あなた。あるかどうか分かりませんが、あったとしても、公開したら使い物にならないことがばれてし

まうから出せない。

一時期、公営風車とか市民風車とかいって、自治体や市民グループが風力発電に手を出すことが全国で流行ったんですが、どこもかしこも赤字で、壊れたまま修理費が出せず、放置されている風車がいっぱいあります。アホ丸出しのおバカモニュメントですよ。赤っ恥のシンボルマーク。私たちはこんなものにお金を出してしまいました、という恥さらしの記念碑ですね。

そろそろ風車の正体もばれてきているから、自治体も、今後はよほど馬鹿なところじゃなければ手を出さないでしょう。でも、風車を企業のPRに使えると思っている能天気な経営者が、まだまだいっぱいいる。メディアによる洗脳で、風車をいいイメージでしか見ていない大衆が大多数を占める限りは、こうしたエコエコ詐欺は続くし、大企業が風車を広告塔に利用しようという馬鹿な風潮も、なかなかなくなるないでしょ。

テレビをつければ、風車や太陽光パネルの映像ばかり出てきますよね。いやですね、馬鹿らしいですね。

あまりにも幼稚です。こんな詐欺に簡単に騙されている人たちは……」

教授の話は止まらなくなってきた。

私はどんな顔をしていいのか悩みながら、ただただ聞いていた。

そのうち、風がやんだ風車のように、教授は突然口をつぐんだ。

「……ええと、もういいかな。論文に入っていない話をこれ以上していても、あなたも迷惑なだけでしょうから」

「いいえ、とても勉強になります。刺激的なお話です」

「今言ったことは、今まで私が書いた本に全部書いてありますから読んでください。そのための本なんですから」

楯山助手が描く暗すぎる未来像

時間にして一時間半ほどだったろうか。私は追い出されるようにして教授の仕事部屋を出た。ドアを出ると、楯山助手がコートを羽織っているところだった。

「終わりましたか？ 私も帰るところです。駅までお送りしましょう」

楯山助手は、私の訪問のためだけに今日はわざわざ教授宅に来ていたのだろうか。それにしても、お茶の一杯も出なかった。

寒い日だったので、助手の言葉に甘えて、表に停められていた黒い軽自動車の助手席に乗り込んだ。巨漢の楯山助手が乗ると、軽自動車は数センチ沈み込んだように見える。彼の運転を邪魔しないよう、私は狭い助手席でさらに小さくなっていた。

「どちらまで帰られるんですか？」

私が家の場所を告げると、楯山助手は少しがっかりしたような顔で言った。

「ああ、同じだ。私は隣のxxですから。じゃあ、駅までじゃなくて、近くまで乗っていきませんか？」

窮屈な思いをしながら小一時間、この軽自動車ドライブをするのはどうかと思っただが、私は反射的に「お願いします」と答えていた。

小岩沢教授は変人の類だろうが、ある意味、分かりやすい変人と言える。偏屈で口の悪い学者は他にもいっぱいいるだろう。

しかし、この楯山助手は、私が今まであまり会ったことのないタイプの人間だった。

メタボ体型と甲高い声。愛想がなく、笑わない顔。しかし、家が近所だと分かり、送っていかうと言ってくれる程度には十分親切。

私の興味は、教授から彼に移っていた。

「楯山さんは、教授の助手を務めるようになって長いんですか？」

「いいえ～」

楯山助手は気の抜けたような声で答えた。

「そもそも、小岩沢先生の助手ってわけでもないんですよ、僕は。学部四年のとき、ゼミに所属していましたが、正式に助手をやってくれと頼まれたわけでもないし」

「でも、先生の前稿をまとめているのは楯山さんですよ？」

「ええ。それはまあ、頼まれてやっています」

「無報酬で？」

「いいえ～。ときどき口座にお金振り込んでいただいています。こちらから請求することはしていませんし、仕事の前に金額の提示があるわけでもないんですけどね。まあ、労働に対しての対価としては、決して多くはなく、しかしまあ、極端に少ないということでもなく……。ボランティアってわけじゃないですよ。少なくとも」

話しているうちに、私がこのタイプの人間をあまり知らないのは、単純に世代が違うからかもしれないと思い始めた。若い世代にはこうした淡泊な話し方をする人間が増えているのかもしれない。

「でも、教授のお仕事を手伝っているということは、やはり教授の仕事に共感を覚えている……ということなんでしょう？」

「どうですかねえ。共感って言葉はピンと来ませんけどね。僕らがやっていることは物理学という学問ですから。共感とか、好きとか、嫌いとかいうのとは違いますよ。鋭いとか、センスがいいという価値判断はあるかもしれませんが」

「じゃあ、小岩沢教授の考え方は鋭いと感じますか？」

「鋭いというより、まっとうだと思いますよ。ものすごくまっとう。ただ、今の物理学会では、このまっとうさがなぜか異端視されるんですよ。

CO₂温暖化説にしても、物理学会の中では、あんなものには関わるべきではないという空気があるんです。あれは政治問題なんだから、下手に触ってはいけない。政治家がアカデミズムの裏付けを必要としているなら、気象学会に任せておけばいいと。

まともな物理学者であれば、CO₂温暖化説が危ういことは分かります。データを見たって、CO₂増加が気温上昇の後を追いかけていることは歴然としているわけですし。

ただ、温暖化防止、CO₂削減は、国策ですからね。ケチをつけても、いいことはひとつもないんです。それよりも、水素エネルギーだの、海水の温度差からエネルギーを取り出すだの、常温核融合だのといった話を持ち出して、研究費をいっぱいもらったほうがいい、という学者が多いんです。そんなものは、物理学的に見てナンセンスだということは分かっているのに、ですよ。

例えば、水を電気分解して水素を取り出し、その水素をエネルギーとして使うなんてことは、実験室の中の授業としてならいいけど、現実社会の、エネルギー産業として成立するはずがありませんよね。そんなことしても、エネルギー収支がマイナスになるから意味がないってことくらい、中学生だって分かる話でしょ。

エネルギー問題は、どれだけのエネルギーを使ってどれだけのエネルギーを得られるかという計算問題です。石油は、すでに過去において長い時間をかけて、太陽エネルギーを蓄積した物体として存在している。石油を使って石油を掘っても、取り出した石油から得られるエネルギーはプラスになる。だから成立するんです。エネルギー資源として。

でも、水素だの太陽光だの風力だのというのはそうじゃない。すでに利用できる形で存在しているわけじゃないから、エネルギーを使って利用できる形に変えなくちゃいけない。その結果取り出したエネルギーが、そのエネルギーを取り出すために使ったエネルギーより小さかったら何の意味もないわけです。

学者の多くは、当然そんなことは分かっています。一部には本当に分からない学者もいるようですが、それはペーパーテストの世界から一歩も外に出られないまま大人になってしまった未成熟な人たちでしょう。ただの計算の世界を科学と思い違いして、そこに安住しているゲーム少年のような学者。スーパーコンピュータを神のようにあがめている学者、あるいは、自分に才能がないことを半ば自覚して、研究費と安定した生活、少しばかりの名誉欲を満足させる一生を死守しようとする官僚的な学者。

CO₂温暖化説というのは、そうした人々にとっても、とりあえず肯定していればお金が自分

たちのところにも多少は回ってくるし、自分の居場所を脅かされることもない。都合がいいんです。保護された互助会協定のようなものですね。

小岩沢先生は、権力に保護されていても、嘘は嘘だと言っているにすぎません。別に学者としての良心などという大げさなものじゃないですよ。教育を受け、知を磨いてきた人間として、恥を知っているだけです。ところが、そのことが異端扱いされる。そこが現代社会の悲劇であり、怖さなんですよ」

楯山助手は、甲高い声で喋り続けた。

そのへんで私はようやく気づいたが、彼の運転はものすごくマニアックで、プロっぽかった。うまさを見せつけるような派手な運転ではないが、ステアリングの切り方ひとつにも、スムーズさと美しさがあった。それが、狭い軽自動車の運転席に押し込まれた大きな体で行われる。実に奇妙な感じだった。

「でも、そこまで理解しているんだから、やはりあなたは小岩沢教授にとって、かけがえのない助手なんじゃないですか。……つまり、助手の定義がどうのではなく、よき理解者というか、身内というか、信頼できる味方として大切にされているという意味ですよ」

私は、楯山助手がまた何か理屈をつけて反論する前にそう付け加えた。

楯山助手は、何か言いたそうに口をとがらせたが、それについては否定しなかった。

少し沈黙が流れたので、私はさらにこう言った。

「教授は、アカデミズムの世界では、正当な評価、扱いを受けていないと思いますけど、あなた自身はどうなんですか？ つまり、教授の助手的働きを続けていることで、損をしていると感じていますか？」

「損？ 出世できないってことですか？」

楯山助手は、小馬鹿にしたような、あるいは達観したような笑みを浮かべて訊き返した。

「興味ないんですよ。そういうのって。興味ないっていうより、うざいでしょ。そんなことを気にしながら生きていくなんて。どう生きたところで、最後は大した違いはないんですから。人間、遅かれ早かれみんな死にますし」

「え？ それはまた極端というか、乱暴な言い方ですね」

「う～ん、ちょっと違うんですよ。まあ、伝わらないでしょうね。何を言っても。私が言っている死というのは、個人の死ではなく、人類の死ということです。

どう頑張っても、今の文明は長くは続かないわけですよ。努力してどうこうできるわけじゃない。学問や技術革新で救えるわけでもない。

だって、そうでしょう？ 飼っている犬が病気になれば、獣医のところ連れて行って延命できるかもしれない。でも、現代文明を永遠に続けるとか、七十億の人間をこれから先ずっと飢えさせずに生存し続けさせるなんてことはできないんです。

そんな大それたことを考えてもしょうがない。だったら、一人の人間、個人としては、目の前の犬と仲よく暮らすことくらいしかできないし、それ以上のことを考えてもしょうがないでしょう」

「これはまた学者とは思えない悲観論ですね。物理学者からそういう人生観を聞けるとは思わ

なかったなあ」

実際、私は少し驚いていた。

このちょっとオタクっぽい青年が物理学者だというのも不思議なら、彼の口から文明終末論が飛び出すことも意外だった。

タイプはまったく違うが、言っていることはトミーに近いのではないか。

確かめるために、こう訊いてみた。

「じゃあ、楯山さんは人類の終わりは近いという考えですか？」

「考えていうと、哲学みたいな響きがあってちょっと馴染まないんですけどね。今の文明や人類の歴史がもうすぐ終わりになることは、ずっと昔から決まっていることだという気がしていますけどね。」

現代社会を動かしていると自認している人たちは、そう思っていますよ。日本人は、むしろ例外的な人種ですよ。そういう世界観を持っていないという意味で」

「そういう世界観という、終末論ですか？ 世界が終わることは最初から決まっているという……」

「ええ。もっとはっきり言えば、放っておいて終わらないのなら、積極的に終わらせる方向に動かしている人たちがいるということです」

日本人の物理学者までもが終末世界観を語ることに、私は少なからず驚いていた。

そんな私の心中を知ってか知らずか、楯山助手は、突然、予期せぬ質問に転じてきた。

「イシコフさんは、自分が一生かかっても使い切れないほどの金をほしいと思いますか？」

私はその質問の真意をはかりかねながらも、できるだけ真面目に答えた。

「お金はもちろんほしいですけど、使い切れないのなら、持っていて意味がないですねえ。私には扶養すべき家族もいませんし、これから作ろうという気持ちもあまりないです。そこそこの贅沢が実感できる程度の金があれば十分ですね」

「そうでしょう？ 普通の人間なら、そう考えると思うんですよ。ところが、世の中には、金を集めることが趣味というか、快感になってしまって、金集めが人生の目標のようになってしまう人もいます。ホリエモン*みたいにね。」

これはまあ、一種の病理ですよ。でも、世界を動かしている富豪たちは、そういう病気ではなく、桁違いの富を集めています。彼らは金集めが人生の目的だなどと思い違いするほど小さな人間ではないですよ。では、何のためにそれだけの金を集めているのだと思いますか？」

「頑張らなくても、一度巨大な集金システムが動き始めると、どんどん金が集まってきてしまうんじゃないですかね」

「甘いですね。そんなわけじゃないですか。金を集めるのはそれなりの知力を結集し、面倒な作業をしなければできませんよ。」

答えを言ってしまうえば、ある目的のために金が必要だからです。

その目的とは、簡単に言えば、この世を終わらせることです」

「この世を終わらせる？ 何のために？」

「さらに上の意思に従うためです」

「この世界を動かしているごく一部の人間より上の存在というのは、神と呼ばれる存在ですか？」

「神.....ねえ.....。まあ、なんでもいいですよ、名称は。名前があったほうが便利なので、そう呼んでおきましょうか。人間よりは優れた能力を持った生物ということですね」

「生物.....なんですか？ 人間や犬猫同様に、形のある生物？」

「もちろんです。私はそう思っています。そうじゃないと、あまりにも宗教的な話になってしまうので、收拾がつかないですよ。

聖書を読んでみても、神に相当するものは明らかに生物です。人間によく似た生物。もしかすると、肉体は人間と交配が可能くらい近い生物かもしれない。ただ、知能はずっと優れているらしい.....。

この世が終わることは、人間が決めたことではなくて、人間を動かしている別の生物が決めたことです。その生物を神と信じ、自分たちは神にいちばん近いところにいると思っている人間たちが、神の計画、つまり、現代文明社会を一旦終わらせ、世界をリセットさせるという計画を実現させるために動いている。

金の力.....つまり、経済はそのための手段なんですよ。

彼らは、自分たち、あるいは人間のために経済を動かしているわけじゃない。神のために経済を支配し、コントロールする。そうした使命を自分たちは担っていると信じている」

そこまで一気に話すと、楯山助手は助手席の私をちらっと見やった。

車は渋滞に巻き込まれていた。この先に開かずの踏切があるらしい。

「馬鹿馬鹿しいとお思いになるなら、この話はここでやめておきます。私も物理学をやっている人間ですから、この手の話に興味を示さないかたが多いことは知っていますので」

「いえいえ。馬鹿馬鹿しいとは思いませんよ。それどころか、私が最近考えさせられているテーマに、あまりにもぴったり符合する話なので、驚いています。友人のひとりが、似たようなことを言っているのを聞いたばかりだったので」

私は、楯山助手が話をやめてしまわないよう、そう言った。

「そうですか。ご友人が.....。それは羨ましいですね。私の周りには、こんな話に乗ってくる人間はまずいませんよ。たまにいるかと思うと、ただ、アニメやゲームの世界に染まっているだけで、自分の頭で考えていないレベルで、がっかりさせられます。

イシコフさんは実に面白い。なかなかいませんよ、こうした話を普通に話せる人って」

「いや、それはよかった。じゃあ、もう一歩進んだ話をしてくださいよ。

楯山さんが考える神.....聖書に出てくる神は生物なわけですよ？ 人間との接点というか、関係はどういうことなんですか？」

「それは分かりません。多分、死ぬまで分からないんじゃないですかね。

自分たちが神に選ばれた特別な人間だと信じ、世界を動かしている人たちも、きっと分かっています。ただ、神には逆らえないことだけは分かっている。だから、神が決めた通りのシナリオを自分たちが実行することで、最終的には救われるのではないかと期待しているんでしょうね。

聖書は実に混沌とした内容ですが、よく読むと、二つのことが共通して語られています。

ひとつは、『神は自分の姿に似せて人間を作った』ということ。もう一つは、『世界は必ず終末を迎える』ということです。

この二つのメッセージを、何の偏見、曲解もなく解釈すれば、人間という種は、他の生物の手が加わって作り出されたものであるということ、そして、それを作った生物にとって、現代文明社会は、計画の途中段階にすぎないということです。

聖書を冷徹に読めば、そういう内容が見えてくるはずなんです。

ところが、多くの人間はこの意味を正確無比に理解しようとしません。理解できるだけの能力を持っていないと言ってもいいでしょう。だから、聖書の内容を、人生訓や生き方の規範、あるいは、信じる者は死後に救われる、といった精神安定剤のようなものに置き換えてしまう。各宗教の指導者たちも、そのことは十二分に分かっているから、表向きはそうしたレベルの教えとして布教する。そうしないと広まらないからです。

日本人は、幸か不幸か、聖書のことをよく知りません。知らないがために、聖書でマインドコントロールされることも少ない。日本人をコントロールするには別の方法が有効だということは、戦後のアメリカの統治戦略が証明していますが……」

「天皇制の利用ですか？」

「ええ。でも、その話をし始めると話が脱線するのでやめましょう。

話を戻して、神とはどんな生物なのか……と」

「人間に似た生物なんですよ？」

「ええ」

「でも、人間より優れている」

「ええ。でも、見方を変えれば、必ずしもそうではないと思うんです。人間より劣っているかもしれない」

楯山助手は、渋滞の前を見つめたまま答えた。

「え？ 人間より劣っている生物が人間を支配しているんですか？」

「いいえ、知能が優れているのは間違いないでしょう。劣っているというのは、生物としての総合的な点数をつけた場合のことです。知能は相当発達していても、肉体が衰退してボロボロになっている生物ではないか、と、私は想像しているんですよ」

「ほおお！」

私は思わず変な声を上げてしまった。トミーやシンプソン神父からも聞けなかった、新しい見解だ。

「説明してください。ぜひ聞きたいですね、なぜ肉体がボロボロだと分かるのか」

「いえ、これは本当に想像ですよ。私の勝手な想像です。裏付けはありません。そのつもりで聞いてください」

「はい」

私は早く先が聞きたくて、短くそう返事をしたが、少し声がうわずっていた。

楯山助手は、口元を少し斜めに歪め、私を横目で見ると、今までよりも言葉をゆっくり選ぶよ

うな口調で話し始めた。

「こんなことを言うと笑われそうですが、まずは、世の中に定着している宇宙人の容姿ですね。頭でっかちで、ひよろひよろで、手足が骨みたいに細い。とても過酷な自然環境の中で生き延びられるようには思えませんよね。がっしりした運動選手のような宇宙人像というのは見たことがないでしょう？ もちろん、想像の産物だからどうにでもなると言われればそれまでですが、私はあながち外れてもいないんじゃないかと思うんですよ。

個々の生物に寿命があるように、生物種全体にも寿命があります。よく知られているのは、性を決定するXとYの性染色体のうち、Y染色体は、X染色体に比べると欠損が多く、情報量が減ってきているという話。女性はXXで、同じ染色体が二つなので、一つに欠損ができてもう一方が補えるのですが、Y染色体は常に一つしかないので、欠損が起きたときに補ったり修正したりできないまま次の世代に引き継がれやすい。その結果、長い時間を経ていくと、情報量がどんどん減ってしまうんですね。

世代から世代へと、肉体の情報はコピーされていきますが、コピーのエラーが積み重なっていくと、全体的には劣化する。これは、ハードディスクなどの記録メディアに保存した情報ファイルを何回もコピーしていくとエラーが増えていくというのと同じです。

ところで、人間がずっと追い求めてきた欲求のひとつに、不死、つまり死なないという欲求がありますよね。でも、肉体はどう頑張ったところで劣化していくから、肉体の死は免れえない。

ですから、肉体の劣化は仕方がないと諦めた上で、肉体という入れ物を次々に乗り換えて、精神をコピーし続ける。そうすることで、記憶は永遠に残っていくのではないか……。

そういうのって、誰もが一度は考えたことだと思うんですよ。デジタル時代になって、劣化しないコピーが簡単に行えるようになると、この発想はますます確かなもののように思えてくる。

人間が神と呼んでいる生物は、ずっと昔に、その方法がある程度手に入れていたんじゃないでしょうかね。

自分のクローンを作って、そこに自分の記憶を移植する。そうすることで、永遠に生き続けられる……。人間のクローンは、現代の科学でもほとんど可能のところまでできているようです。すでに成功しているけれど、発表すると影響が大きすぎるので控えているのだとも言われています。

あとは、記憶をそのクローン肉体にコピーする技術が完成すればいい。

それは多分、生物学や医学よりも、電子工学とか化学の分野に関する技術なんだろうと想像できます。コンピュータの世界の驚異的な発展を考えれば、それがあつた時、生物の体内で起きている電子運動の研究と結びついて、とんでもない世界が開けてくる可能性は大いにあると思うんですよ。

神という生物は、そのレベルまで知能や技術を発達させた。そして、実際に、自分たちのクローンに記憶をコピーし続け、さらに加速度的な知的発達を遂げたんじゃないか……。

でも、それと引き替えに、肉体の劣化も進んでいった。クローンを作るということは、エラーが起きたときの修復が難しくなり、劣化する一方になるわけです。

結果、よくイラストで目にするグレイ型宇宙人*のような、頭でっかちで虚弱な肉体を持つ、い

びつな生物になってしまった。

地球に飛来しているという宇宙人は、ぎりぎりまだ動ける程度の肉体を使った前線部隊じゃないかと思うんですよ。本隊は、ほとんど動けないくらい劣化した肉体を器にして、知能だけが巨大化している。あまり動けないから、どこか安全な場所にいる。そこで、人間の時間感覚では考えられないような長い時間を支配している。

しかし、これ以上、肉体を弱体化、劣化させると、自分たちの種が消滅してしまう。

そこで神は、自分たちの精神、つまり過去からの膨大な記憶を移植する新鮮な肉体を作り直すことにしたんじゃないでしょうかね。

それで、自分の姿に似せて人間という生物を作った。聖書に記述がある通りです。

人間は神の姿に似せて作られたというのは、そういう目的からすれば当然のことなんです。神の精神、記憶のデータを移し替える新しい健康な肉体として作り出されたわけなんだから」「なるほど！」

私は思わずそう相づちを打っていた。

私が真面目に聞いていることを知って、楯山助手はさらに続けた。

「ところで、聖書には、ネピリム*という、神と人間の間存在的な存在を匂わせるものが出てきますよね。あれは、神が作った人間に、神の遺伝子をかけあわせて作ったものなのかもしれません。しかし、ネピリムには子孫を残す能力がなかったのでしょうか。ライオンとヒョウの雑種レオポンが一代限りなのと同じように。だから、ネピリムにすべてを託すわけにはいかなかった。長い時間かけて、文明を築き直すためには、やはり人間を使わなければいけなかったんでしょう。

神はすでに、時間を支配する技術を持っているから、待つことはできる」

「なるほど。で、地球上に、人間を使って、自分たち——神のための新しい環境を構築する予定表が預言書だというわけですね？」

私はいつしかすっかり楯山助手の話にのめり込んでいた。

「その通りです！」

楯山助手も、理解者が現れて喜んでいようだった。

「つまり、預言書は、人間のためのものではないんです。神のためのスケジュール表ですね。神の都合によって人間を動かすための計画書なんですよ。

世界を動かしている少数の人間たちは、その計画書の実行者、運用者を自認しています。自分たちは、神が作った計画書を遂行する選ばれた存在だと思っている。選ばれた人間は、最後は神によって、次のレベルに引き上げてもらえると信じている。千年王国とか光の国とかアセンション*とか、そんな言葉で表される大変革と輝かしい未来図がそれですね」

「うーん、それはどうなのかなあ」

私は思わず口を挟んだ。

「あなたのお話だと、神にとって、人間は道具にすぎないんでしょう？ そんな神が、道具である人間の将来まで考えてくれますか？ たとえ、道具の中のトップにいて、自分たちの計画を遂行するために動いてくれたとしても、所詮は道具でしょう？ 必要なくなったら捨てるだけなんじゃないですか？」

うな人口の多い国が、アメリカ並みにエネルギーを使い始めたら、あっという間に枯渇してしまいます。そうすると、すでにエネルギーを使って快適に暮らしている人間は困る。自分たちの快適な暮らしや文化を維持するためには、増えすぎた人間を減らさなければならない。とりあえず、世界人口は半減させる。冷徹に計算すれば、そういう結論しか出てきません」

「本気ですか？」

「もちろんです。……いや、私が本気でそう考えているということではないですよ。世界を動かしている者たちは本気だという意味です。神が計画しようがしまいが、今、世界を動かしているごく少数の人間たちが、自分たちの未来を守ろうとした場合でも、世界人口を減らすことは避けられない目標なんです。

物事には必ず適正な規模やサイクルというものがある。生物は生まれて死ぬまでの間に、理想的な成長カーブを描きながら、怪我や病気をせずに、本来の寿命を全うすることが理想でしょう。無限に成長する生物はありません。そういう生物がいるとすれば、巨人症のような病気ですよ。

ところが、ほとんどの経済学者や企業経営者たちは、今なお、経済の無限成長こそが善であるという馬鹿げた前提でものを考えています。そんなことはありません。メディアも同調している。

低レベルの学者や金持ちに合わせていたら、地球がもたない。となれば、まともな分析力のあるごく少数の人間たちは、相当荒っぽい手段を使ってでも人口を減らす、つまり、大量の人間が死滅するように世界を動かしていく必要がある。

大量の人間が死ぬためにはどんなシナリオが考えられるか。戦争よりは伝染病や天変地異のほうが効率がいいんじゃないか。いや、何か一つ的手段では無理があるから、戦争も含めて、複数の手段を複合的に駆使して世界人口を半減させるのがよかろう……。

まあ、そんなところじゃないですか」

楯山助手がそこまで言い終わったところで、車はようやく渋滞の原因になっていた踏切を越えた。踏切の先も、ところどころ信号でつかえたものの、道路は今までの渋滞が嘘のようにすいていて、気がつくと、私が住む町の景色の中に入っていた。

「楯山さんは、なぜそこまで知っているんです？」

別れる前に、私はどうしても訊いておかなければならないことを言った。

「知っている？ 知りませんよ、私は何も。今話したことは全部私の想像です。なんの根拠も証拠もありません。人から聞いたわけでもない。最初にそうお断りしたでしょう？」

ただ、そうとしか考えられないという思いは、日に日に強くなっていますね。

話を戻せば、小岩沢先生は、日が照れば気温が上がる、雲が出れば気温が下がるというようなあたりまえのことを、データを示して言っているだけのことです。それが、今の物理学会では完全に異端扱いされ、無視されています。論文発表の場さえ与えてもらえない始末です。

そんなのを毎日見ていたら、まともな神経ではやっていられないですよ。なぜこんなことになっているのかと考えていくと、無理のない結論が、今述べてきたようなことなんです。あらゆる面で世の中が破滅に向かってコントロールされているからこうなる……と。

ただ.....まあ、人間ってそういうものなんだろうな、と思うんですよ。

理詰めで生きているわけじゃない。毎日、起きて、ご飯食べて、金のために肉体と知力を使って、はたから見ればどうでもいいようなことに夢中になったり、ちょっとしたことで気分がよくなったり悪くなったりする。正確無比な機械のように動いているわけじゃないんです。

人類とは何かといった根源的な問題への興味よりも、ああ、今無性にメロンパンが食いたいなという刹那的欲求のほうがずっと大きかったりする。それがいいとか悪いとかじゃなくて、人間とはそういうものだってことですよ」

総括としてはずいぶん虚しいものになっていた。すでに、家からいちばん近いポイントは通り過ぎていたこともあり、私は礼を言って、そこで車を降りることにした。

楯山助手にも小岩沢教授にも、それっきり会っていない。

私が翻訳を手伝った小岩沢教授の論文が、欧米で発表されたのかも知らない。

ただ、政権が代わっても、国内の政治、経済の現場では、相変わらず子供だましにもならないような二酸化炭素温暖化説が席捲し続けている。つまり、人々は相変わらず熱力学第二法則*を無視した錬金術的新技術に期待し、「自然エネルギー」幻想を捨てられずにいる。この流れが変わることは当分なさそうだ。

小岩沢教授はますます不機嫌になり、楯山助手はそんな現実をすべて呑み込んだ上で、今日も黒いクラシックカー風軽自動車を華麗に運転していることだろう。

●無名の人才陶芸家 ステファン・ダスター

小岩沢教授宅を訪ね、教授よりもさらに変わったキャラクターの持ち主である楯山助手と話を
する機会を得た日から、私は軽い情緒不安定になっていた。

夜中、暑くもないのに寝汗をかいて目が覚めてしまう。水を一口飲んでからまた寝床に入るが、
明け方近くまで眠れない。とことん脳が疲れた末に寝入るのは外が明るくなってきてから。それ
から二、三時間くらいは深く眠っていると思うのだが、目が覚める前には眠りが浅いまま、閉
塞感の強い夢を見続ける。おかげで、起きてからしばらくは身体が思うように動かないほど重く、
苦しい。

そんな日がしばらく続いた。

原因はよく分からなかった。

現代文明の終焉について、複数の人たちから、よく似た基本認識に基づいた話を聞かされてき
たことで、自分の精神状態が不安定になったとは考えにくかった。

彼らの話はどれも実に興味深かったが、内容がそれほど悲劇的、あるいは絶望的、虚無的だと
は思わなかった。そんな考え方をする人たちがいるのだなあ、という軽い驚きはあっても、それ
で自分の人生観が変わるということでもない。

私はもともと、人間社会に特別な理想や期待を抱いてはいなかったし、ましてや未来を心配し
て何か世のため人のために活動するようなタイプではない。

この世の終わりが来るというのなら、それは仕方のないことだろう。決められた「計画」をひ
っくり返せるわけではないし、なるようになるだけだ。そう思う。

しかし、彼らの個性的な終末論を聞いてからは、自分の肉体、あるいは精神のどこかに、微妙
な狂いが生じているような感覚に襲われることが多くなった。

今までは自然に身体や精神が反応し、バランスを取れていたものが、足下がふわふわして、不
必要な力を入れないと転んでしまう……そんな感じだろうか。

自分で自分の精神状態が納得できないまま、2008年が終わり、2009年になった。

体調は少し落ち着いてきて、春の訪れと共に、また元の自分に戻れたような気がしていた。それ
でも、ときどき、足下がふわっと揺れるような、奇妙な感覚に襲われることがある。

桜の季節が過ぎた頃、私はふと、インターナショナルスクール時代のクラスメイト、ステフ
アン・ダスターのことを思い出していた。

ステファンは芸術関連にはとてつもなく多才な男で、美術と音楽ではずば抜けた才能を示した。
音楽の才能に秀でているという点ではトミー・ボアナムと双璧をなしていたが、トミーが芸術
関連だけでなく、学業全般に優秀な成績を誇っていたのに対して、ステファンは芸術関連以外に
はあまり興味を示さず、成績も芳しくなかった。

なにより、ふたりは性格が正反対だった。陽と陰とでも言おうか。明るく、ジョークを飛ばし
ながらすいすいと世渡りをしていくトミーに対して、ステファンは笑顔を見せることも少なく、

いつも何かに悩んでいるような顔をしていた。

学生時代、こんなことがあった。

ステファンとトミーは、楽器を弾きこなす力において、すでにプロ級の腕前だった。ステファンは打楽器とベース、トミーはギターと尺八が特にうまかったが、一緒にバンドを組むということはしなかった。バンドの中でお山の大将になっているトミーと違い、ステファンは技量の違いすぎる者と一緒に演奏することになんの意味も見いだせなかったのだろう。その「下手なやつとは一緒にやらない」という姿勢は異常なまでに頑なで、次第に、誰もステファンと音楽の話をしなくなった。

一度だけ、トミーとステファンがふたりだけで即興で演奏したことがある。校内のクリスマスパーティか何かだったと思うが、ステファンがウッドベースを弾き、トミーが尺八を吹いて、なんの打ち合わせもないアドリブ演奏を披露した。

それはもう、誰もがのけぞるようなすごい演奏だった。

全体の雰囲気としては、非常にゆったりしたブルースという感じだろうか。ステファンがどっしりと刻むベースに絡むように、トミーの尺八が、無国籍で不思議な音空間を作り出す。ひとつひとつの音は、確かにウッドベースと尺八なのだが、ふたりの演奏が絡み合うと、独特の粘りが生じる。違う色の絵の具を無造作に水面に放り出した途端、複雑な色が組み合わさった曼荼羅が生まれる……そんな感じだろうか。

トミーはところどころに速弾き（尺八だから「速吹き」だが）もまじえ、テクニックも思う存分見せつける。私たち聴衆が「おおっ」という感嘆の声を上げると、笑みを浮かべる余裕もあった。

一方、ステファンはそれをしっかりと支えながらも、終始、次の音を探るような目で、苦しそうな顔をしていた。ベースから出てくる音は決してふらついたりしないのだが、私には、苦行に耐える修行僧の顔のように見えた。

トミーは、自分がふんだんにテクニックを見せつけた後、ステファンにソロをやれと目で合図し、ちゃんと共演者の見せ場も作った。

ステファンは少し迷ったような表情をしたが、かなり長いベースソロを披露した。トミーに負けないテクニックに、私たち聴衆は、トミーへと同様に、惜しみない拍手を送った。

拍手喝采の後、当然のようにアンコールの声が上がったが、ステファンはさっさとベースを抱えて舞台を降りてしまった。トミーも「こういうのはあんまりやるとボロが出るから」と、笑いながらステファンに続いて舞台を降りた。

後にも先にも、ふたりが一緒に演奏したのはそのときだけだった。

私は今でもあのときのことをたまに思い出す。ステファンはなぜアンコールを断ったのだろう。あれだけの演奏をしながら、何が気に入らなかったのだろう。

ステファンは孤独だったが、なぜか私とは仲がよかった。私も、一緒に遊ぶのはトミーとのほうが多かったが、ステファンといる時間のほうが、不思議な安堵感があって、心地よかった。

ステファンは大人になっても定職には就かず、アートの世界で食べていたが、トミーのように派手な稼ぎとは無縁の生活のようだった。

以前はたまに、本の装丁やポスターのデザイナーとして名前を見かけたことがあるが、最近はずいぶん長いこと仕事の話は聞かない。

自分の才能を現実的手段に変えることができたトミーは、今でも金にはまったく困っていないし、社会に負けることなく、というよりも、人間社会の欠陥を手段として利用して快適な人生を送っている。

そうしたずば抜けた起用さ、したたかさとは縁のないステファンは、今、どんな暮らしぶりなのだろうか。

気になり始めると、とことん確かめてみないと気が済まない私は、かつての級友たちに連絡をして、ステファンのことを訊いてみた。その結果、数年前に伊豆半島のどこかに移住して、陶芸を始めたらしいということが分かった。

五人目で、ようやくメールアドレスを知っているという友人に行き着いた。ネットがつながらないのか、コンピュータが嫌いなのか、メールはケータイのみOKらしい。

そのアドレス宛に、遊びに行ってもいいかとメールしてみた。

すると、三日してから「今来ても、あんまり楽しくはないだろうけれど、来てもらって困ることではない」という、煮え切らない返事があった。

返事をもらった翌日、私は伊豆に向かった。

下田まで電車で行き、そこでレンタカーを借りて、地図とカーナビを頼りに海岸沿いの道を走った。

平日だったが、天気がよいせいか、時折観光客らしき車ともすれ違った。

ステファンの家は南伊豆の山の中にあった。何度か道に迷ったが、伊豆半島は基本的に道路網は複雑ではない。枝道に入るポイントさえ間違わなければ、なんとかなる。

しかし、その最後の枝道は、とてつもなく狭い道だった。

地図にもカーナビにも出ていない進入路を見つけるのは無理で、まばらな人家の前を何度も行ったり来たりした末に、ようやく通行人を見つけて道を訊くことができた。

「ステファンさん？ ああ……みどりさんそこ」

深い皺の刻まれた老女は、そう言うと、すぐ目の前の民家を指さした。

「そこの横の道を入れて行って、突き当たったとこの家だ」

指をさした先にはすぐには「道」らしきものが認められなかったが、よく見ると、民家の軒先のように見えた場所の奥に、未舗装の進入路が延びていた。

「みどりさんそこ」の意味がよく分からなかったが、勘違いしているわけではなさそうだ。

老女に礼を言って、私は小型のレンタカーをその進入路に進ませた。

道の両脇からはアロエや果樹の枝があちこちで突き出していて、車の側面に傷をつけそうになった。

これだけ細い道なら、すぐに行き止まるだろうという予想は見事に外れ、車が1台ぎりぎりを通れるだけの山道は、かなり奥まで続いていた。

途中、道の脇に小さな建物がいくつかあったが、人が住んでいる住居ではなく、廃屋か農作業小屋のようだった。

このままではUターンさえままならないと不安になってきた頃、ようやく目指す家が眼前に現れた。

果樹園に挟まれるように建っているログハウス風の家。

ここに間違いない。

家の前には、何年も洗車したことがないのではと思える古いワンボックスカーと、泥だらけの軽トラックが並んで停まっていた。その隣にもう一台止められるスペースがあったので、そこに車を入れた。

何度か切り返しながら駐車している私を見つけ、建物の中から、ショートカットの髪を揺らせて、ひとりの少女が笑顔で飛び出してきた。まるで、休み時間に校庭に飛び出していく小学生のようだった。

「いらっしゃい！ アランさんですね？」

少女は弾むような、歌うような声でそう言った。

「はい、こんにちは……」

そう答えた途端、相手が立派な大人の女性だということに気がついた。

サラサラの髪に化粧っけのない幼い顔。何もしなくても十二分に美しさをたたえた小柄な肉体。身体全体から発散しているオーラは、十代の若さ、純粹さそのものだったが、よく見ると、落ち着いた眼光やわずかに緩んだ口元は、大人のものだった。

「はじめまして。ステファンの妻の翠です」

「みどり……」

「はい。字は翡翠ひびのスイです」

ああ……。

私は一瞬言葉を失っていた。

ステファンが結婚していたこと、相手が歳の離れた日本人女性だということを、私は不覚にもこのとき初めて知ったのだった。

同時に、この無垢な美少女のような女性と、こののどかな田舎に暮らしているステファンに嫉妬を感じた。こんな気持ちを抱くのは、私としては極めて珍しい。自分の心の動きに、私自身がひどく驚かされた。

「こんにちは。アラン・イシコフ……独身です」

私は不要な情報を付け加えて言ったが、ユーモアにもならず、すぐに後悔した。

「よく場所が分かりましたね」

「いや、そこでおばあさんに訊きましたから。訊かなければ分からないですね、この道は」

「そうですね？ 入り口が特に分かりづらいんですよ。さあ、どうぞ」

翠さんは開けっ放しの家の玄関のほうを手で示した。

アプローチには、煉瓦を砕いたような大粒の赤土と陶器片のようなものがモザイクのように敷き詰められていた。その色合いがなんともシックで、ステファンらしい。

建物は大きすぎず小さすぎず、センスのいい佇まいの平屋建て。一見すると角材を使ったログハウスのようにも見えるが、厚めの板で構成された在来工法の家だった。

四畳半くらいありそうな広く開放的な玄関に入ると、頭を鴨居にぶつけそうな長身の男が微笑しながら迎えてくれた。

「やあ」

「おお」

卒業以来だから、四半世紀ぶりくらいだ。

ステファンは顔中に銀色の髭を蓄え、学生時代の顔を重ねるのが難しかった。

「久しぶりだな」

「ほんとだね」

最初のうちは英語で短く挨拶を交わしていたが、その後は、そばにいる翠さんのことも意識して、私もステファンもほとんど日本語で話した。

しかし、会話はすぐに外からの爆音で遮られた。

「ちっ。戻ってきたか……つかの間の静寂だったな」

ステファンが、窓の外に目をやり、苦々しく言った。

「ヘリコプターか？ 何かやっているの？」

「山を壊しているのさ。このところ毎日、昼間はほとんどこんな感じだ」

「山を壊している？」

「そう。頂上の一部を壊して、ウィンドタービンを建てている。ようやく落ち着ける場所を見つけたと思ったら、このざまさ」

「ウィンドタービン？」

「風力発電用の風車のこと。『風車』というのはどうも牧歌的というか、ほとんどの人がいいイメージを抱いているようなんでね。俺はウィンドミルという言葉は極力使わずに、ウィンドタービンと言っているんだけど、まあ、日本語では『風車』という言葉は短くて言いやすいからね。日本語では、相手に合わせて『風車』と言うこともある」

ステファンはそう説明したが、私には風車の用語よりも、「俺」という一人称が耳に残った。別に違和感があったわけではない。そういえば、学生時代も、トミーやステファンは、日本語を話すときは「俺」と言っていたなあ、と思い出したのだった。

「こんなところに風力発電施設が建つのか？」

「呆れるだろう。今やっているのは風車建設に先駆けた送電用の鉄塔と送電線敷設工事なんだが、なんと、ヘリコプターで資材を運び込んでいるんだ。たまらないね」

ステファンの家は周囲が低い山に囲まれているので、工事用ヘリの音はサラウンド効果抜群の響きかたをしていた。コロッセウムに渦巻く歓声とでも言おうか。

「今来ても、あんまり楽しくはないだろう……って言っていたのは、このことだったのか」

私は窓の所まで行って、山の稜線ぎりぎりに飛ぶヘリを見ながら言った。

「そう。俺は喧噪から逃れて創作活動に集中したくてこういう辺鄙なところにやってきたのに、まったく不愉快だよ。こんなひどい環境なら、高層マンションの一室にこもって電気窯で作陶していたほうがマシだ」

「さくとう……？ ああ、作陶ね。そうなんだってね。そのへんの話を知ったかっただ。音楽

はやめたの？ 一時期は、商業デザインも手がけていたようだけど」

「いや、やめたとか、そういうことではないんだが……」

会話が再びヘリの音で遮られた。

「話もできないな。少し早いけれど、飯を食いに出ないか？ 本当ならここでもてなしたいところだけれど、こういう状態なんでね」

そう言うと、ステファンは椅子から立ち上がった。

私たち三人は、翠さんが運転する汚れたワンボックスカーで、海岸沿いに下田方向に向かった。

連れて行かれたのは、県道からは少し入った、海岸沿いにある店だった。白い土壁が特徴的な、洒落た建物だ。

伊豆は、デザインがでたらめな建物が多いが、この店の外観は救いがある。

ステファンは慣れた様子で店の奥に進み、隅の四人掛けのテーブルにさっさと座った。

「お勧めはつみれ鍋だけど、なんでもおいしいよ、ここは」

そう言いながら、ステファンはメニューを私の前に置いた。

店主が焼酎のボトルを持ってやってきた。

店主は撫で肩のオカマっぽい中年男性で、どうやらステファン夫妻は馴染み客らしい。

「いらっしゃい。ちょっとご無沙汰だったじゃないの。ボトルが寂しがってましたよ」

テーブルの中央に置かれたボトルは、見たことのない芋焼酎で、中身は三分の一くらい残っていた。

「焼酎以外がよければ、好きなのを頼んでくれ」

まだ日は高かったが、どうやらステファンは呑む気満々のようだった。

「運転は？」

「翠の担当だから大丈夫。翠はまったくのゲコなんだ」

ステファンの隣に座った翠さんは、悪戯っぽく、横目でステファンを睨む素振りをみせた。子供っぽい容姿とはアンバランスな色香が一瞬発散される。

彼女がまったく飲まないと知って、私は大いにがっかりした。

「じゃあ、薄目のお湯割りで。後は全部任せるよ」

「OK。じゃあ、大将、いつもの感じで」

「はい、りょ〜かい」

大将と呼ばれるのがあまりにも似合わないオカマっぽい店主は、何も確認せずにすっと引き上げていき、グラスを3つと、氷の入ったペール、水差し、お湯割り用の小さなポットをトレイに載せて持ってきた。

翠さんは私のグラスに焼酎を入れ、ポットからお湯を適当に注ぐと、次に自分のグラスにただの水を注いだ。

ステファンはアイスペールから氷を1つ取り出し、自分用の焼酎ロックを作った。

「さてと、なんの話をしていたんだっけ？」

一口飲んだ後、ステファンが言った。

「陶芸の話だったかな。音楽は辞めたのかとか、そんな……」

「ああ、そうだった。

音楽か……。音楽は別に、辞めるとか続けるとかいう感じでやっているわけじゃないから……。プロになろうと思ったこともないしね。仕事として頼まれればやるけれど、そんな話は滅多にない。かといって、陶芸が金になるのかといえば、もつとまらないだろうね。食うためには、今でもデザイン関係とか、いろいろやっているよ。でも、幸せなことに、贅沢をしなければ、生きていくのに困らない程度の蓄えがある。親の遺産だけだな」

「そりゃあ羨ましい。きみの親って、大金持ちだったの？」

「俺の親……というより、俺の親の一族が金持ちなんだ。特に母親のほうのね。父親はドイツで学者をやってて、何年か前に死んだんだけど、その遺産も多少はもらった。あとは、翠の親もそこそこの金持ちだよ」

「本当に羨ましいね。じゃあ、働かなくても食べるのに困ることはないんだ」

「そうだね。贅沢さえしなければね。これは本当にラッキーだと思っているよ。創作活動に生活を持ち込まなくていいわけだから。純粹にアートを追求できる。これは大切なことだよ、アーティストにとって」

「じゃあ、陶芸に力を入れるようになったのは、アートの中でも、陶芸をいちばん追求したくなったってということ？」

「う〜ん、そうだと答えることもできるけど……きちんと説明するのは難しいな。でも、おまえさんは、そんなことを訊きたくてここまで来たわけか？ 何か他に理由があるんだろう？」

ステファンはそう言うと、手に持ったグラス越しに、私の目をじっと見つめた。

私は返答に困った。

私はなぜここに来たのだろう。

ステファンが今どうしているのか気になった。実際に目で見て確かめたかった。それは確かなのだが、なぜそんな気持ちになったのか、自分でもよく分からなかった。

「特に理由はないんだ。いいから、きみの芸術論を聞かせてくれよ。今はそれを聞きたい気分だから」

「ほおお。そりゃ珍しい。ああ、でもおまえさんは昔からそうだったね。人の話をなんでもよく聞く。ただ耳を傾けるだけじゃなくて、そこそこ興味を示し、きちんと理解しながら聞くという特技を持っていた。そう、特技だな、これは。カウンセラーになればいいと思ったもんだ」

「カウンセラーになれて言ったのはきみだけ？ 誰かにそう言われたことは覚えているんだけど、誰から言われたのかは忘れてしまった。何人かに言われたと思うんだけど、その中にきみもいたのかな」

「どうかね。覚えていないね」

「まあ、それはいいよ。芸術の話だろ。続けてくれ」

私は、じっくり聞かせてもらうよ、という意味表示代わりに、翠さんが作ってくれた焼酎のお湯割りを一口飲んだ。思っていたより薄い味だった。もしかすると、翠さんは自分が呑まないもので、酒というものを分かっていないのかもしれない。

店主がつくね串を並べた皿を持ってきた。話が弾んでいるのに遠慮してか、黙ってテーブルの上に置いていった。

「音楽にしる美術にしる、俺が興味があるのは純粹アートだった……」

ステファンはそう語り始めた。

「純粹アートって意味、分かるかな。音楽なら、音だけの世界。言葉が入っている歌は、純粹な音楽じゃない。聴いた者が、音以外に、歌詞の意味を頭でとらえてしまうからね。絵なら、具象画より抽象画のほうが純粹性が高いという考え方。具象画は、被写体をどれだけうまく描けるかという技術が評価されがちだからね。写真がなかった時代には、特にそういう面が強かったと思う。

俺は昔から、そういう志向だった。だから、音楽でも、ベースとかパーカッションといったシンプルな楽器が好きだった。美術なら、抽象画や、抽象的な立体造形に心惹かれた。

器用さとか、超絶技巧といったものにはあまり興味がなかったんだな。もっと根源的に、魂を揺さぶるものを追求したかった。

ところが、大人になるにつれ、自分の感性と他の人たちのズレが大きくなっていくのに気づいた。世の中の多くの人には、もっと人間的というか、人工的というか、細工されたものや脚色されたものを愛しているらしいと気づいたのさ」

「世俗的ってことでしょ？」

今まで黙っていた翠さんが、そこでふいに口を挟んだ。

ステファンは彼女を見ることもせず、続けた。

「世俗的？ ……まあ、そうだな。外れてはいない。言葉としてはいちばん近いかもしれないな。要するに、芸術作品に共感する人間の数には、俺は興味がないってことだ。

アートの真髄というのは、もっと違うところにある。言葉を超えたもの。説明できないもの。それを追求するのがアーティストだと、俺は思っている。

だから、それはまあいいんだ。

さらに時間を経て、もっと困った問題に直面してしまった。

自分が信じている芸術的価値とは、一体なんに立脚しているのか、って悩み始めてしまっ

て。最初にはっきり感じたのは音楽に対する疑問だった。

人が持っている音感は、全然違うということに気づいてしまったんだな。

例えば、三つの和音で構成されたフレーズを聴いたとき、いちばん高いパートのメロディだけを聞いている人、真ん中のパートを聞いている人、下のパートを聞いている人と、きれいに分かれるんだよ。その人が聴きたいパートが違うのか、聴覚がそもそも違っているのか、脳の問題なのか、それとも幼少時の音感教育の問題なのか……理由は分からないけれど、とにかく、同じ音を聞いているのに、人によってまったく違って聞こえていることは確かなんだ。

ライスという音を聴いて、日本人は白いご飯を思い浮かべるけれど、英語ネイティブは米ではなく、シラミ (lice) のことを思い浮かべるかもしれない。

それに近いことが、音楽の世界でも起きているんだ。

つまり、音楽の感動は、人それぞれが持っている音感に根ざしている。音感が違えば、感動の基準も違う。これは世俗的云々とも関係がない。

例えば、英語とドイツ語とどちらが価値が高いと思う？」

「どちらとも言えないだろう、それは」

「そういうことさ。音感の違いも同じことだ。誰の音感のほうが価値が高いなんて言えそうもない。

となると、音楽の感動とはなんなんだろうと、改めて疑問に思い始めた。

俺が深く感動している音楽を聴いて、おまえさんもまたすばらしいと感じたとする。でも、俺とおまえでは全然違って聞こえているかもしれない。それを確かめる術もない。

感動の根拠が曖昧なものを、どうやって追求すればいいのか。

いくら考えても分からないから、結局は、自分が感動すればそれでいいと思うしかない。しかし、それはいわゆる自己満足というやつではないのか？

.....これはまあ、音楽だけじゃない。他のあらゆる芸術もそうだよな。

同じ絵を見て、『この海の青が渋いねえ』と言っている人が見ている青は、隣で、『そうだね。実にいい！』と同調している人が赤と感じている色なのかもしれない。

そんなことで悩んでいるうちに、だんだん、芸術には純粋性とか普遍性とか絶対的価値なんてないんじゃないかと思うようになってきたんだ。

俺は一体何を求めているのか？

音楽の価値を追求していくと、物体ではなく、音という空気の振動、すぐに消えてしまうものに根ざしている価値ということになる。その点、絵画はモノだから、作品は現実存在する。

でも、そのコピーでも感動はある。本物じゃなければいけないってことはない。美術商的な価値ではなく、芸術的価値という意味でだよ。モナリザが名画だというなら、モナリザを撮影した写真を見ても感動するはずだ。

そういうことも考えていくうちに、モノとしての絶対的価値をもきれいに内包している芸術として、陶芸に行き着いたんだ。

陶芸もコピーは作れる。でも、質感や耐久性まではなかなかコピーできない。

さらには、俺が今追求しているのは、日常食器としての陶芸なんだ。飾りではなく、実際に使ったときに価値が増していくような作品。

例えばマグカップ。これは、取っ手の形状や質感がすごく重要になる。液体を入れて持ったとき、いかにしっくりくるか.....。どんなに見た目がかっこよくても、持ったときにしっくりこないカップはダメだ。

さらには、熱い飲み物を入れたとき、どれだけ心地よく唇が飲み物に触れられるか。

口をつけた途端に火傷するとか、カップのヘリが分厚くて、飲み物がスムーズに口の中に入っていないとか、そういうのはダメなわけ。

あとは耐久性だな。何十年使っても割れない、欠けない、手に馴染んで落としにくいから壊れる確率も低い.....そういうカップを作るのは至難の業なんだよ。

でも、基本として、俺がやるのは純粋にアートなわけだから、ただ呑みやすい、壊れにくいカ

ップではなんの意味もない。カップそのものが完全にアートでなくては意味がない。

.....この両立がとてつもなく大変なことだね。

そんなわけで、今は陶芸の世界に集中しているんだ。いつまで続くかは分からないけれどね」

ステファンが語る妻、そして芸術

そこまで一気に言うと、ステファンはグラスにもうひとつ氷を入れ、焼酎を足した。

これだけ喋るステファンを、私は今まで一度も見たことがなかった。

今までと言っても、学生時代の記憶だけだが、とにかく、彼がこれほど饒舌だとは思わなかった。焼酎一杯で口が軽くなったのか。それとも、よほど溜め込んでいたのか。

「ストイックだね。とっても。普通の人間には真似できない」

私は少し考えた後、そう評した。

ステファンは心外そうな顔をした。

「全然違うだろ。ストイックな人間が芸術なんてやるもんか。芸術の探求ってのは、究極の快樂主義者の生き方だよ。俺はなにも我慢したくないんだ。誰かの指図にも従いたくない」

「でも、相当意志が強くなければ、きみのような生き方はできないよ。たとえ生活のための金に困っていないとしてもね。毎日、ゴルフしたり犬と散歩したり大画面のテレビで映画を見たり.....そんなことで一生の時間を過ごすほうが楽だろう」

「どうかな。それはそれで、潔い生き方だと俺は思うよ。人間という生き物を特別視していないってことだから」

「特別視？」

「そう。人生には特に意味なんてない。人間は特別な生き物じゃない。自分がこの世に生を受けたことに、大した意味はない。ただの偶然だ。だから、生きることに何か意味を求めたり、生物的な快樂以外の価値を探したりはしない。

.....そう割り切って生きている人たちというのは、俺からみれば、大したもんだよ。

俺はそこまで達観できないからあがいている。自分の人生には、何か特別な意味があるはずだと思いたがっている。芸術というのは、人間のあがきなんだ」

「そのあがきを、世間一般の人はかっこいいことだと思っているんだよ。人より速く走りたいとか、人より何かがうまくなりたいとか、そういうことに専心できる人を、多くの凡人は尊敬するんだよ」

「でも俺は尊敬されていない。知られていないからな。尊敬も軽蔑もされない」

「有名になりたいのか？」

「いや」

「じゃあ、いいじゃないか。それに、少なくとも周囲の人たちはきみの才能を分かっているはずだ」

「周囲の人？」

「いちばん身近なのは.....翠さん？」

私はステファンの隣で黙って聞いている翠さんを見た。

翠さんはちらっと視線を私に向けたが、口元を、笑みとは言えない程度にかすかに歪めただけで、何も言わなかった。

代わりに、ステファンが言った。

「翠は俺を尊敬してはいないんじゃないかな。でも、俺の感性を愛しているとは思う。これは結構すごいことだね。俺の感性に同調してくれる人って、意外と少ないんだ」

「焼き物の作品のことか？」

「俺の作陶はね、まだ翠以外には誰も見たことがないから」

「誰も見たことがない？」

「みんな割っちゃうんですよ」

そこで翠さんがようやく口を挟んできた。

「形や色はすばらしいんですけど、陶器として使えないからダメなんですって。玄関前のアプローチに破片がいっぱい埋め込まれているんです。あれは全部、作っては壊し、作っては壊しの結果なんですよ」

「使えないっていうのは……？」

私はステファンに確かめた。

「文字通り、使えないんだよ。カップの取っ手が簡単にもげてしまったり、珈琲を入れておくと色が染みこんだり、熱湯を入れるとやたら熱くなって持てなかったり、一見かっこいいんだけど、口をつけると唇が触れる感触がぼてっとして、これじゃあ飲み物がまずくなりそうだなと感じたり……」

俺が焼いたカップより珈琲がおいしく感じそうなマグカップが、大型スーパーの雑貨売り場で数百円で売られていたりする。どうしようもなくダサい模様が描かれていたりするんだけど、それを見ないで使えば、おいしく飲めるカップがね。

どんなにかっこよくできあがっても、使えない陶器は価値がない……と、俺は思っているんでね。使う気がしないと分かった時点で、不合格品として粉々に割ってしまうのさ」

「もったいない！」

「だって、使い物にならない陶器なんだぜ。自分でそう言うのは悲しいけれど」

「私にはほとんど分からない程度のレベルなんですけどね」

再び翠さんが入ってきた。

「言われてみれば、そうかしら……という程度のものなんですよ。彼は大袈裟に言いますが、多分、美術画廊に並んでいる陶芸家の作品のほとんどは、彼の作るマグカップよりずっと実用性がないですよ。」

でも、彼自身が納得できないんだから、しょうがないですよ。目指しているものが違うんだから、私たちがどうこう言うことはできないでしょう？」

「ストイックだなあ」

私はまたその言葉を口にした。

ステファンは今度は否定することもなく、ただ鼻でふふんと笑う仕草をした。

ステファンが黙ってしまったので、私は翠さんに訊ねた。

「奥さんは、ステファンのそういうところを尊敬していますか？」

彼女は少し困った表情をしたが、何秒か考えた後、こう答えた。

「尊敬……というのとは違うかもしれませんね。でも、単純に『好き』ですよ。好きだから一緒

にいるんだし。私は彼の感性や技術を愛しています。

私が憧れても自分ではとうてい形にできないこと、できないものを、彼は易々と実現してしまうんです。ときには、私が想像もしていなかったレベルで。今まで見たことも聞いたこともないようなものを、彼は作り出すんですよ。それを、私はほとんど間違いなく好きなんですね。ああ、こんなのもありえたんだ、って、常に新しい発見ができるんです。

こういう経験は、他の誰と一緒にいても絶対にできないと思います。そんな人に出会えたことが奇跡だと思うんですよ。だから……尊敬とか、そういうのとはかなり違う感覚ですね。雪の結晶を顕微鏡で見たときのような驚きというか……。

こんなふうになっていたんだ。なんだろうこれは……っていう感動……というか……。

う～ん、うまく言えないなあ。どう言っても、なんだか馬鹿馬鹿しく聞こえてしまいそうだし。……あ、のろけじゃないですよ、これ」

のろけではない、と先に釘を刺されてしまい、私はどう言ってもいいのかわからなくなった。

翠さんの言いたいことは少し分かる気がする。でも、それこそさっきステファンが言っていた、自分が青だと思っている色が隣の人には赤く見えているかもしれないという話と同じで、突き詰めていけば分からない。分かり得ないのだろう。

そんな会話の間も、店主は次々にうまい料理を運んできて、私は久しぶりに、本来意地汚い自分の舌を満足させられた。

ステファンはめっぽうアルコールが強いようで、早々と焼酎のボトルは新しいものに入れ替わった。翠さんのグラスにはただの水が入ったままだったが、それに手を伸ばすことはほとんどなく、飲み物なしで、料理だけを食べていた。これでは血液が濃くなってしまわないかと、心配してしまった。

白い服を着ていたせいもあるだろうが、彼女は怪しい宗教団体の熱心な信者のようにも見えた。以前、テレビを通じて見たオウム真理教の女性たちはみな髪を伸ばしていたが、彼女らがショートカットにすると、ちょうど翠さんのようになりそうだった。

髭の中に顔が埋もれているような長身の外国人と、小柄で化粧つけない童顔の美女。この夫婦は、どこに行っても奇異な目で見られることは間違いないだろう。

ただでさえ浮いている夫婦が、今のような芸術論を語ったりしても、まともに耳を傾ける者は少なそうだ。おそらく、普段のふたりは、外に向かって自分たちから何かを語るようなことはなく、ただただ、周囲と摩擦を起こさず、円満に生活していくことを心がけているのだろう。

そこに私のような人間が現れたものだから、何年分もの思いがほどけて、非日常的に饒舌になっているのかもしれない。

どこまでよい聞き手になれるか自信がなかったが、その夜、私は精一杯ふたりの話の聞き役を務めた。

別に無理をしたり、苦痛だったわけではない。ふたりの話は十分に面白かった。

ただ、どこまで理解できたかと言われれば、はなはだ心許なかった。

店にとって迷惑であつたらう長い時間居座り続け、私たちは夜中によりやく引き上げた。

翠さんは普段ならとくに寝ていた時間らしく、家に着くなり、「あとはお二人でごゆっくり」と言って、奥の寝室に引き上げた。

ステファンはまだ飲み足りない、話し足りないらしく、ダイニングからワインを持ち出してきて、私にも勧めた。

「おまえさんもかなり強いね。昔からそうだったけ？」

「学生時代、一緒に呑んだことなんてなかったら？」

「そうか。知らなかっただけか」

「いや、普段はほとんど呑まないよ。自分でも、こんなに呑めるもんなんだなとびっくりしているんだ。それと、きみが酒豪だということも意外だったよ。なんとなく、酒を飲まないような印象があったから」

「俺も普段はそんなには呑まないよ。翠が呑めないからね。しらふの妻の前で、ひとりでボトルを空けても虚しいしなあ」

「彼女は一滴も飲めないの？」

「多分……」

「多分？」

「呑めないって言ったことはないんだよ、翠は。いつも『私は呑まない』と言うんだ。体質的に呑めないのか、主義として呑まないのか、俺は別に追及するつもりはないから、本当のところは分からない」

「彼女は一言も説明しないの？ 夫婦なのに、ずいぶん淡泊なんだね」

「淡泊……そうだね。それが秘訣かな、彼女と一緒にいるための。俺たちはあまりにも違いが多いから、ひとつひとつ確認するのが怖いというところもあるかな」

ステファンは、翠さんが消えていった奥の寝室のほうを見やりながら、少し声のトーンを落として言った。

「だって、趣味や性格が合うからこそ一緒になったんじゃないのか？ それとも、お互いに違うから惹かれ合うということなのかな？」

「う～ん。どっちもちょっと違うな。説明するのは難しいんだが……知りたいか？」

ステファンは、酔いで潤んだ目を向けた。その中には、挑戦的な光も宿っているように見えた。

「知りたいね。今夜はとことん話を聞きたい。滅多にない機会だし」

私はすぐに答えた。

「そうか……。いいだろう。理解してもらえとはとうてい思えないけれど、一度くらいは言葉にしてみてもいいかもしれない。俺が翠のことを他人に話すのは、多分これが最初で最後だ」

「了解。心して拝聴いたしましょう」

私は手にしていたワイングラスをテーブルの上に置き、両手を軽く組んでみせた。

ステファンは逆に、自分のグラスにさらになみなみとワインを注いでから話し始めた。

「俺が翠と一緒にいる最大の理由はね。セックスだよ」

そう言うと、ステファンは私の反応を見た。

私は黙っていた。

「つまらない理由だと思うか？ セックス……。俺にはとても大切なことさ。

翠とのセックスは、なんというか、実にじっくりいくんだ。俺は彼女の肉体を、この世の何よりも愛している。小さな身体、控えめな胸の隆起、癖のない黒髪、それを無造作に切っているように見えて、絶妙な質感が漂ってくる……。まあ、説明するのは馬鹿げているけれど、あらゆるところがたまらない。

おおっと、酔っぱらっているからこんなことも口にできるんだな。笑っていいぜ。とにかく、彼女の肉体、彼女とのセックスは、俺にとっては最高のものなんだ。

おそらく、彼女にとっても、俺とのセックスは欠かせないものになっていると思う。

翠は、俺とのセックスには愛情が介在するからエクスタシーを得られていると思っているふしがある。でも、それは多分間違いだ。単純に、俺たちは肉体的にフィットしているだけさ。精神的（mental）なものじゃない。純粋に肉体的（physical）な相性がいいんだ。

少なくとも、俺にとっては彼女とセックスしているときに、精神的なものを強く感じたことはない。

彼女はエクスタシーに近づいたとき、『Say!』って連呼する。最初はなんだろうと思ったよ。多分、I love you. と言ってくれ、という意味なんだろう。

でも、俺はセックスのとき、一度もそんなことを言ったことはない。彼女が考えているLOVEと、俺が考えているLOVEが同じものでなければ、嘘になってしまう。それって、なんか気持ち悪いじゃないか。

俺は彼女の肉体を純粋に愛している。彼女が俺とセックスしているとき、何を愛しているのか、俺には分からない。分かりようがない。だから、沈黙する。

分かっているのは、翠のように、常に俺を愛してくれる女はいないし、俺の望むようなセックスに応じてくれる女も他にはいないってことだ。それだけで、俺にはかけがえのない相手なんだ。

……なんて話は、つまらないか？」

ステファンが答えを求めてきたので、私は困惑した。

確かに、ステファンの芸術家然としたイメージには合わない。それ以上に、あまり愉快的話とは言えなかった。

「つまらなくはないよ。でも、それだけじゃないだろう？ 彼女と一緒にいる理由は」

私は逆に問いかけた。彼女の代わりに、そう訊かざるをえない気持ちだった。

「もちろん、それだけってことはない。経済的な理由もあるし、日常的な様々な利益（benefit）もある。彼女が運転してくれるおかげで、今夜もこうして外で呑めたし、買い物だの、いろんな手続きだの、近所づきあいだの、俺にとって面倒なことは、全部翠が担当してくれる。

……という話も、面白くないかな？」

「いや……どうもきみの話は自分を偽悪化しているような印象を受けるんだけどね」

「そういう意図はないね。正直に自分の心を分析しているだけだ」

「じゃあ、訊くけれど、翠さんのメンタル部分での魅力はどうなんだ？ 気持ちがきれいだとか

、正直で表裏がないとか、誰にでも親切だとか……」

「もちろんそういう面はあるだろうさ。でも、それは俺にとっての魅力というよりは、万人にとって都合がいい性格ってことじゃないのかな」

「またそんな言い方を……。どうもきみは、酔うと自虐的になる癖があるみたいだね」

「そんなことはない。素直に言っているだけだ。俺にとって彼女のいちばんの魅力はセックスだ」

「じゃあ、それはいいよ。その次……二番目の魅力はなんだい？」

「その次は、彼女の審美眼だな」

「審美眼？」

「そう。俺の作品に対して、ほぼ絶対的なプラス評価をしてくれる。それも鼻眞目ではなくて、心から感動しているのがよく分かる。失敗作には的確な批評が下るからね。

すぐそばに、最大の理解者、共感者がいる。それって、俺にとっては快感だし、なによりの心のマッサージだ」

「彼女もそんなことを言っていたね」

「そうそう。これがセックスの次の魅力だね」

「じゃあ、ついでにもっと探してみようよ。利発だとか、気が利くとか……」

「頭はよくないよ。驚くほど理解力がない。それはもう、しょっちゅうストレスになる。説明しても理解しないから、諦めて俺からは何も言わなくなるんだけど、そうすると、何も言ってくれないと言って怒り出す。ほんとに勘弁してほしいと思うよ」

「そんなふうには見えないけどね。きみの芸術の最大の理解者なのに？」

「審美眼と理解力は別ものだよ。翠を見ていると、嫌と言うほどそのことが分かる。

例えば今、俺たちが直面しているいちばんの問題は目の前のウィンドタービン建設なんだが、彼女は最初から風車が建つことを歓迎していたんだ。こんなひどい目にあっている今でも、風車そのものは悪くない。風力発電は必要なものなんだって言い続けている。あんなもの役に立たないと、いくら説明しても理解できないらしい」

「へえ……」

「経済の仕組み、歴史的事実、物理の根本法則……そういうものをきちんと理解できないんだね。情報の真偽についても、テレビや新聞で報道されていることが本当のことだと思っている。

彼女はもともと裕福な家に育っていてね、とても素直ないい子なんだけれど、根本的に、社会の階層システムを肌で感じていないところがある。パンがなければお菓子を食えばいいのにと行ったというどこかの王女みたいなところがあるんだな。あまりに邪気がなく、それに近いことを言うことがあって、こっちは啞然とさせられる。

今の俺たちの生活は、彼女が我慢できる、というか、正常を保てるぎりぎりの線かもしれない。彼女は、自分では、私はどんな貧乏にでも耐えられるとか言っているけれど、それは大いに怪しい。

しかしまあ、それはいいんだよ。芸術は貧困からは生まれえない。富の余剰があって初めて生まれてくるものだからな。俺自身、芸術のためには金なんていらぬとか、そんなことは口が裂け

とも言えないし、考えたこともない。トミーのような贅沢は望まないけれど、普通に生きていける程度の生活は守りたいさ。幸い、今まで、経済的にそこまで追い込まれたことはない。俺たちは基本的に贅沢はしないんでね」

「う～ん……」

私は思わず呻き声のようなため息を漏らしていた。

これがトミーの口から語られる言葉だったら、抵抗なく聞いていただろう。でも、私はステファンに対しては、もっと崇高な、芸術を追求するため世俗をきっぱり捨てた仙人のようなイメージを抱いていた。それだけに、酔った彼の口から発せられる言葉のひとつひとつが信じられなかった。

「ちょっと酔いが回りすぎたかな。こんなことは今までなかった……」

ステファンは、ようやく我に返ったような口調で言った。

「まあ、いいじゃないか。今日は特別だってことで」

「そうだな。俺が、自分のことや、翠との夫婦生活について誰かに話すなんてありえない。考えたこともない。なぜかおまえさんにはいらんことまでつい話してしまう。おまえさんは本当に不思議なやつだよ、アラン」

「楽しく呑めたなら嬉しいよ。来た甲斐があった」

「そもそも、なんで俺に会う気になったんだっけ？」

「なんだろうね。きっかけはトミーかな。トミーと久々に会って、いろいろ話して、それで、その後しばらくして、きみのことを思い出した。学生時代のことをいろいろ思い出しているうちに、どんどん気になってしまっただけ。今、どうしているんだろうって」

「トミーか。あいつとも会っていないな。どんな感じだった？」

私は、六本木のバーで偶然会って、その晩、彼の家にまで行ったときのことをかなり詳しく話して聞かせた。

ステファンは頷きながら聞いていたが、一通り私の話が終わったところで、こう言った。

「逆ならよかったんだがな」

「え？」

意味が分からず、私はすぐに訊き返した。

「いや、俺とトミーさ。トミーが俺の家に生まれ、俺がトミーの家に生まれていればよかったってことさ」

「どういうこと？」

「ああ……いや、いいんだ。忘れてくれ」

最後は気になる言葉を残して、「特別な夜」はお開きになった。

私はダイニングの片隅のソファで寝かせてもらった。

翌朝、ヘリコプターの音で目を覚ました。

ステファンはすでに起きていて、キッチンで朝食の準備をしていた。

翠さんは隣町の介護センターにパートの勤めに出かけたという。

昨日の話では、親の遺産などを食いつぶしているので生活には困っていないとのことだったが、「困ってはいない」というのは、妻がパートで働きに出なければならない程度の手当ができていたということなのか。それとも、翠さんはなんらかの主義、哲学に基づいて介護センターに通うのだろうか。気になったが、そのときは敢えて確かめなかった。

ステファンが用意してくれたパンとゆで卵の朝食を食べた後、私は一宿二飯の礼を述べ、そろそろ帰ると告げた。ステファンは引き留めるでもなく、「そうか」と言っただけだった。

別れ際、玄関の外に敷き詰められた陶器の破片を見ながら、「作品、ひとつくらい残っていないのか？」と訊いてみた。

ステファンはちょっと考えてから、「ああ、ひとつあるよ」と言って、ウッドデッキの隅を指さした。

そこには薄汚れた陶製の深皿がひとつあった。

「野良猫用のご飯入れだ。大きさも形もちょうどよかったから、これは残してある。作陶を始めてすぐの頃のやつだ。形や模様は気に入っているんだけどね」

私は近づいてしゃがみ込み、その器をよく見てみた。

薄いグレーの素地に、赤みがかった細い線が絡み合うように入っている。派手な主張はしていないが、絶妙の気品が漂っているところが彼らしい。

「かっこいいじゃないか。猫にはこれが分かるだけの審美眼があるのかね」

「ないだろうな。今まで何匹もここにご飯を食べに来てはいなくなっただけで、褒めてくれた猫は一匹もない」

私のつまらないジョークに、ステファンはジョークで返した。しかし、そういう顔が真顔で、少しも笑っていない。こういうところも、ステファンが学生時代、友人があまりできず、孤立した理由なのだろう。

「そうか。でも、黙っていても、一匹くらいは分かっているやつがいるのかもしれないよ」

私はそう言って、レンタカーに乗り込んだ。

運転を始めてしばらくの間、何か忘れ物をしたような気がして仕方なかったが、結局、それが何かは分からなかった。

(第二巻へと続く)